統一的な基準による財務書類

令和元年度決算分

南陽市財政課

１　統一的な基準による財務書類
　　（一般・全体・連結 財務書類三表）
２　統一的な基準による財務書類説明資料
３　南陽市の財務書類（分析編）

【様式第1号】

一般会計等貸借対照表

（令和2年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	43,491,362,529	固定負債	16,181,929,943
有形固定資産	41,480,534,871	地方債	14,073,851,943
事業用資産	23,557,749,102	長期未払金	0
土地	9,529,449,347	退職手当引当金	2,108,078,000
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,740,480,981	その他	0
建物減価償却累計額	-16,856,747,268	流動負債	1,638,481,984
工作物	434,414,982	1年内償還予定地方債	1,265,805,380
工作物減価償却累計額	-289,848,940	未払金	0
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	278,632,119
航空機	0	預り金	94,044,485
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0	負債合計	17,820,411,927
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	0	固定資産等形成分	44,455,812,560
インフラ資産	17,748,875,868	余剰分（不足分）	-16,824,768,330
土地	3,545,821,566		
建物	65,520,000		
建物減価償却累計額	-31,671,358		
工作物	29,689,065,464		
工作物減価償却累計額	-15,519,859,804		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	0		
物品	1,170,503,595		
物品減価償却累計額	-996,593,694		
無形固定資産	32,832,000		
ソフトウェア	32,832,000		
その他	0		
投資その他の資産	1,977,995,658		
投資及び出資金	401,590,958		
有価証券	28,901,658		
出資金	372,689,300		
その他	0		
投資損失引当金	-160,999,999		
長期延滞債権	82,509,458		
長期貸付金	21,849,008		
基金	1,642,211,859		
減債基金	9,297,000		
その他	1,632,914,859		
その他	0		
徴収不能引当金	-9,165,626		
流動資産	1,960,093,628		
現金預金	1,063,056,267		
未収金	19,471,686		
短期貸付金	0		
基金	877,576,864		
財政調整基金	776,116,228		
減債基金	101,460,636		
棚卸資産	0		
その他	0		
徴収不能引当金	-11,189	純資産合計	27,631,044,230
資産合計	45,451,456,157	負債及び純資産合計	45,451,456,157

【様式第2号及び第3号（結合）】

一般会計等行政コスト及び純資産変動計算書

自　平成31年　4月　1日
至　令和2年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額	
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）
経常費用	13,778,550,398		
業務費用	7,383,919,362		
人件費	2,262,195,775		
職員給与費	1,636,821,602		
賞与等引当金繰入額	278,632,119		
退職手当引当金繰入額	173,783,610		
その他	172,958,444		
物件費等	4,933,085,919		
物件費	2,775,708,944		
維持補修費	587,183,572		
減価償却費	1,570,193,403		
その他	0		
その他の業務費用	188,637,668		
支払利息	113,560,824		
徴収不能引当金繰入額	23,469,199		
その他	51,607,645		
移転費用	6,394,631,036		
補助金等	2,407,119,572		
社会保障給付	2,294,065,117		
他会計への繰出金	1,664,980,811		
その他	28,465,536		
経常収益	342,380,502		
使用料及び手数料	144,540,866		
その他	197,839,636		
純経常行政コスト	13,436,169,896		
臨時損失	22,107,018		
災害復旧事業費	11,107,005		
資産除売却損	13		
投資損失引当金繰入額	11,000,000		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	0		
臨時利益	3,241,762		
資産売却益	3,241,762		
その他	0		
純行政コスト	13,455,035,152		13,455,035,152
財源	12,588,723,643		12,588,723,643
税収等	9,602,197,472		9,602,197,472
国県等補助金	2,986,526,171		2,986,526,171
本年度差額	−866,311,509		−866,311,509
固定資産等の変動（内部変動）		−954,729,891	954,729,891
有形固定資産等の増加		466,832,627	−466,832,627
有形固定資産等の減少		−1,570,488,921	1,570,488,921
貸付金・基金等の増加		1,158,549,899	−1,158,549,899
貸付金・基金等の減少		−1,009,623,496	1,009,623,496
資産評価差額	8,319,316	8,319,316	
無償所管換等	−25,102,150	−25,102,150	
その他	71,559,368	11,560,368	59,999,000
本年度純資産変動額	−811,534,975	−959,952,357	148,417,382
前年度末純資産残高	28,442,579,205	45,415,764,917	−16,973,185,712
本年度末純資産残高	27,631,044,230	44,455,812,560	−16,824,768,330

【様式第4号】

一般会計等資金収支計算書

自　平成31年　4月　1日
至　令和2年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	12,208,370,916
業務費用支出	5,813,739,880
人件費支出	2,285,678,895
物件費等支出	3,362,892,516
支払利息支出	113,560,824
その他の支出	51,607,645
移転費用支出	6,394,631,036
補助金等支出	2,407,119,572
社会保障給付支出	2,294,065,117
他会計への繰出支出	1,664,980,811
その他の支出	28,465,536
業務収入	12,886,019,727
税収等収入	9,596,675,725
国県等補助金収入	2,946,479,171
使用料及び手数料収入	144,462,666
その他の収入	198,402,165
臨時支出	11,107,005
災害復旧事業費支出	11,107,005
その他の支出	0
臨時収入	0
業務活動収支	666,541,806
【投資活動収支】	
投資活動支出	1,625,382,526
公共施設等整備費支出	466,832,627
基金積立金支出	1,105,649,899
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	52,900,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,053,207,763
国県等補助金収入	40,047,000
基金取崩収入	952,487,736
貸付金元金回収収入	57,135,760
資産売却収入	3,537,267
その他の収入	0
投資活動収支	−572,174,763
【財務活動収支】	
財務活動支出	1,250,323,104
地方債償還支出	1,250,323,104
その他の支出	0
財務活動収入	1,098,200,000
地方債発行収入	1,098,200,000
その他の収入	0
財務活動収支	−152,123,104
本年度資金収支額	−57,756,061
前年度末資金残高	1,026,767,843
本年度末資金残高	969,011,782

前年度末歳計外現金残高	97,470,001
本年度歳計外現金増減額	−3,425,516
本年度末歳計外現金残高	94,044,485
本年度末現金預金残高	1,063,056,267

【様式第1号】

全体貸借対照表

（令和2年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	65,789,321,980	固定負債	31,949,923,116
有形固定資産	62,025,000,274	地方債	22,656,388,572
事業用資産	23,557,749,103	長期未払金	0
土地	9,529,449,347	退職手当引当金	2,422,977,618
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,741,751,131	その他	6,870,556,926
建物減価償却累計額	-16,858,017,417	流動負債	2,535,026,077
工作物	434,414,982	1年内償還予定地方債	2,052,329,974
工作物減価償却累計額	-289,848,940	未払金	71,374,329
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	307,703,508
航空機	0	預り金	103,618,266
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0	負債合計	34,484,949,193
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	0	固定資産等形成分	66,657,559,282
インフラ資産	38,141,855,941	余剰分（不足分）	-32,038,777,217
土地	3,786,943,251		
建物	629,094,757		
建物減価償却累計額	-320,361,019		
工作物	59,563,285,540		
工作物減価償却累計額	-25,591,807,588		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	74,701,000		
物品	1,839,251,106		
物品減価償却累計額	-1,513,855,876		
無形固定資産	1,054,049,907		
ソフトウェア	32,832,000		
その他	1,021,217,907		
投資その他の資産	2,710,271,799		
投資及び出資金	404,929,958		
有価証券	28,901,658		
出資金	376,028,300		
その他	0		
投資損失引当金	-160,999,999		
長期延滞債権	184,945,103		
長期貸付金	21,849,008		
基金	2,281,131,500		
減債基金	9,297,000		
その他	2,271,834,500		
その他	84,780		
徴収不能引当金	-21,668,551		
流動資産	3,314,409,278		
現金預金	2,292,981,688		
未収金	170,682,884		
短期貸付金	0		
基金	877,576,864		
財政調整基金	776,116,228		
減債基金	101,460,636		
棚卸資産	13,844,985		
その他	0		
徴収不能引当金	-40,677,143	純資産合計	34,618,782,065
資産合計	69,103,731,258	負債及び純資産合計	69,103,731,258

【様式第2号及び第3号（結合）】

全体行政コスト及び純資産変動計算書

自　平成31年　4月　1日
至　令和2年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額	
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）
経常費用	20,831,263,489		
業務費用	9,220,188,332		
人件費	2,485,722,257		
職員給与費	1,828,565,732		
賞与等引当金繰入額	307,703,508		
退職手当引当金繰入額	171,485,173		
その他	177,967,844		
物件費等	6,250,860,377		
物件費	3,301,761,115		
維持補修費	633,325,536		
減価償却費	2,315,773,726		
その他	0		
その他の業務費用	483,605,698		
支払利息	271,384,892		
徴収不能引当金繰入額	90,268,794		
その他	121,952,012		
移転費用	11,611,075,157		
補助金等	2,595,556,134		
社会保障給付	8,987,022,287		
他会計への繰出金	0		
その他	28,496,736		
経常収益	1,593,040,929		
使用料及び手数料	1,206,995,804		
その他	386,045,125		
純経常行政コスト	19,238,222,560		
臨時損失	104,520,974		
災害復旧事業費	11,107,005		
資産除売却損	23,727,428		
投資損失引当金繰入額	11,000,000		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	58,686,541		
臨時利益	3,241,762		
資産売却益	3,241,762		
その他	0		
純行政コスト	19,339,501,772		19,339,501,772
財源	18,769,464,761		18,769,464,761
税収等	12,037,913,775		12,037,913,775
国県等補助金	6,731,550,986		6,731,550,986
本年度差額	−570,037,011		−570,037,011
固定資産等の変動（内部変動）		−1,121,210,283	1,121,210,283
有形固定資産等の増加		1,012,027,884	−1,012,027,884
有形固定資産等の減少		−2,349,559,459	2,349,559,459
貸付金・基金等の増加		1,277,820,788	−1,277,820,788
貸付金・基金等の減少		−1,061,499,496	1,061,499,496
資産評価差額	8,319,316	8,319,316	
無償所管換等	−19,109,848	−19,109,848	
その他	71,559,368	11,560,368	59,999,000
本年度純資産変動額	−509,268,175	−1,120,440,447	611,172,272
前年度末純資産残高	35,128,050,240	67,777,999,729	−32,649,949,489
本年度末純資産残高	34,618,782,065	66,657,559,282	−32,038,777,217

【様式第4号】

全体資金収支計算書

自　平成31年　4月　1日
至　令和2年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	18,688,558,113
業務費用支出	7,077,482,956
人件費支出	2,540,589,017
物件費等支出	4,143,846,915
支払利息支出	271,384,892
その他の支出	121,662,132
移転費用支出	11,611,075,157
補助金等支出	2,595,556,134
社会保障給付支出	8,987,022,287
他会計への繰出支出	0
その他の支出	28,496,736
業務収入	20,102,108,728
税収等収入	11,985,977,379
国県等補助金収入	6,519,745,942
使用料及び手数料収入	1,209,777,753
その他の収入	386,607,654
臨時支出	69,793,546
災害復旧事業費支出	11,107,005
その他の支出	58,686,541
臨時収入	0
業務活動収支	1,343,757,069
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,264,567,043
公共施設等整備費支出	986,746,255
基金積立金支出	1,224,920,788
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	52,900,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,202,907,683
国県等補助金収入	137,870,920
基金取崩収入	1,004,363,736
貸付金元金回収収入	57,135,760
資産売却収入	3,537,267
その他の収入	0
投資活動収支	−1,061,659,360
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,060,953,959
地方債償還支出	2,060,953,959
その他の支出	0
財務活動収入	1,411,200,000
地方債発行収入	1,411,200,000
その他の収入	0
財務活動収支	−649,753,959
本年度資金収支額	−367,656,250
前年度末資金残高	2,566,593,453
本年度末資金残高	2,198,937,203

前年度末歳計外現金残高	97,470,001
本年度歳計外現金増減額	−3,425,516
本年度末歳計外現金残高	94,044,485
本年度末現金預金残高	2,292,981,688

【様式第1号】

連結貸借対照表

（令和2年　3月31日現在）

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	69,117,529,931	固定負債	34,255,471,078
有形固定資産	65,003,422,854	地方債等	24,463,708,864
事業用資産	26,132,643,414	長期未払金	0
土地	9,930,210,474	退職手当引当金	2,808,013,478
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	34,030,961,618	その他	6,983,748,736
建物減価償却累計額	−18,593,226,381	流動負債	2,931,711,629
工作物	780,053,142	1年内償還予定地方債等	2,311,425,699
工作物減価償却累計額	−520,081,155	未払金	128,755,981
船舶	0	未払費用	19,051,964
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	365,791,568
航空機	0	預り金	105,447,412
航空機減価償却累計額	0	その他	1,239,005
その他	0	負債合計	37,187,182,707
その他減価償却累計額	0	【純資産の部】	
建設仮勘定	504,725,716	固定資産等形成分	69,979,524,697
インフラ資産	38,144,143,087	余剰分（不足分）	−34,457,794,731
土地	3,786,943,251	他団体出資等分	0
建物	629,094,757		
建物減価償却累計額	−320,361,019		
工作物	59,572,361,516		
工作物減価償却累計額	−25,598,596,418		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	74,701,000		
物品	4,778,391,128		
物品減価償却累計額	−4,051,754,775		
無形固定資産	1,058,779,622		
ソフトウェア	35,504,361		
その他	1,023,275,261		
投資その他の資産	3,055,327,454		
投資及び出資金	238,929,958		
有価証券	28,901,658		
出資金	210,028,300		
その他	0		
長期延滞債権	184,954,135		
長期貸付金	27,115,808		
基金	2,625,800,119		
減債基金	9,297,000		
その他	2,616,503,119		
その他	196,446		
徴収不能引当金	−21,669,012		
流動資産	3,591,382,743		
現金預金	2,431,307,823		
未収金	307,356,654		
短期貸付金	0		
基金	877,576,864		
財政調整基金	776,116,228		
減債基金	101,460,636		
棚卸資産	19,809,309		
その他	167,971		
徴収不能引当金	−44,835,877		
繰延資産	0	純資産合計	35,521,729,966
資産合計	72,708,912,673	負債及び純資産合計	72,708,912,673

【様式第2号及び第3号】

連結行政コスト及び純資産変動計算書

自　平成31年　4月　1日
至　令和2年　3月31日

（単位：円）

科目	金額	金額		
		固定資産等形成分	余剰分（不足分）	他団体出資等分
経常費用	22,000,734,408			
業務費用	11,144,720,730			
人件費	3,471,943,094			
職員給与費	2,686,167,191			
賞与等引当金繰入額	365,791,567			
退職手当引当金繰入額	215,882,075			
その他	204,102,261			
物件費等	7,142,117,390			
物件費	3,912,717,989			
維持補修費	708,578,534			
減価償却費	2,490,544,812			
その他	30,276,055			
その他の業務費用	530,660,246			
支払利息	288,185,521			
徴収不能引当金繰入額	90,328,388			
その他	152,146,338			
移転費用	10,856,013,677			
補助金等	1,838,836,721			
社会保障給付	8,987,573,816			
その他	29,603,140			
経常収益	2,650,693,348			
使用料及び手数料	2,088,299,372			
その他	562,393,977			
純経常行政コスト	19,350,041,059			
臨時損失	119,533,180			
災害復旧事業費	11,107,005			
資産除売却損	26,767,771			
損失補償等引当金繰入額	0			
その他	70,658,404			
臨時利益	43,195,761			
資産売却益	3,591,501			
その他	39,604,260			
純行政コスト	19,426,378,478		19,426,378,478	
財源	18,987,237,912		18,987,237,912	
税収等	12,189,617,739		12,189,617,739	
国県等補助金	6,797,620,173		6,797,620,173	
本年度差額	−439,140,566		−439,140,566	0
固定資産等の変動（内部変動）		−796,479,430	796,479,430	
有形固定資産等の増加		1,435,750,174	−1,435,750,174	
有形固定資産等の減少		−2,565,770,939	2,565,770,939	
貸付金・基金等の増加		1,269,095,140	−1,269,095,140	
貸付金・基金等の減少		−935,553,805	935,553,805	
資産評価差額	8,319,316	8,319,316		
無償所管換等	−18,896,573	−18,896,573		
他団体出資等分の増加	0			0
他団体出資等分の減少	0			0
比例連結割合変更に伴う差額	−145,915,573	112,165,395	−258,080,968	
その他	72,711,960	11,560,881	61,151,079	
本年度純資産変動額	−522,921,436	−683,330,411	160,408,975	0
前年度末純資産残高	36,044,651,402	70,662,855,108	−34,618,203,707	0
本年度末純資産残高	35,521,729,966	69,979,524,697	−34,457,794,731	0

【様式第4号】

連結資金収支計算書

自　平成31年　4月　1日
至　令和2年　3月31日

（単位：円）

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	19,735,871,588
業務費用支出	8,879,857,911
人件費支出	3,522,252,482
物件費等支出	4,917,493,243
支払利息支出	288,255,728
その他の支出	151,856,458
移転費用支出	10,856,013,677
補助金等支出	1,838,836,721
社会保障給付支出	8,987,573,816
その他の支出	29,603,140
業務収入	21,350,894,349
税収等収入	12,174,776,664
国県等補助金収入	6,520,379,113
使用料及び手数料収入	2,104,038,699
その他の収入	551,699,874
臨時支出	81,765,409
災害復旧事業費支出	11,107,005
その他の支出	70,658,404
臨時収入	39,554,260
業務活動収支	1,572,811,613
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,648,535,604
公共施設等整備費支出	1,368,506,504
基金積立金支出	1,225,932,100
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	54,097,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,312,266,748
国県等補助金収入	211,864,333
基金取崩収入	1,039,379,649
貸付金元金回収収入	57,135,760
資産売却収入	3,887,006
その他の収入	0
投資活動収支	-1,336,268,856
【財務活動収支】	
財務活動支出	3,349,332,938
地方債等償還支出	3,347,249,924
その他の支出	2,083,014
財務活動収入	2,741,809,422
地方債等発行収入	2,741,809,422
その他の収入	0
財務活動収支	-607,523,516
本年度資金収支額	-370,980,759
前年度末資金残高	2,703,881,997
比例連結割合変更に伴う差額	3,039,953
本年度末資金残高	2,335,941,191

前年度末歳計外現金残高	97,667,594
本年度歳計外現金増減額	-2,300,961
本年度末歳計外現金残高	95,366,633
本年度末現金預金残高	2,431,307,824

令和元年度

南陽市

統一的な基準による財務書類

説明資料

令和3年3月

落合公認会計士事務所

目　　次

Ⅰ　令和元年度　南陽市財務書類の公表について

Ⅱ　地方公会計制度について
（1）固定資産台帳と財務書類作成の必要性
（2）地方自治体における地方債の特徴
（3）企業会計手法の導入
（4）財務書類とは？
（5）統一的な基準の活用方法
（6）日々仕訳とは？
（7）財務書類の作成ツール

Ⅲ　令和元年度　財務書類　（要約）
（1）貸借対照表〔バランスシート〕
（2）行政コスト計算書及び純資産変動計算書
（3）資金収支計算書
（4）相関図

Ⅳ　比率

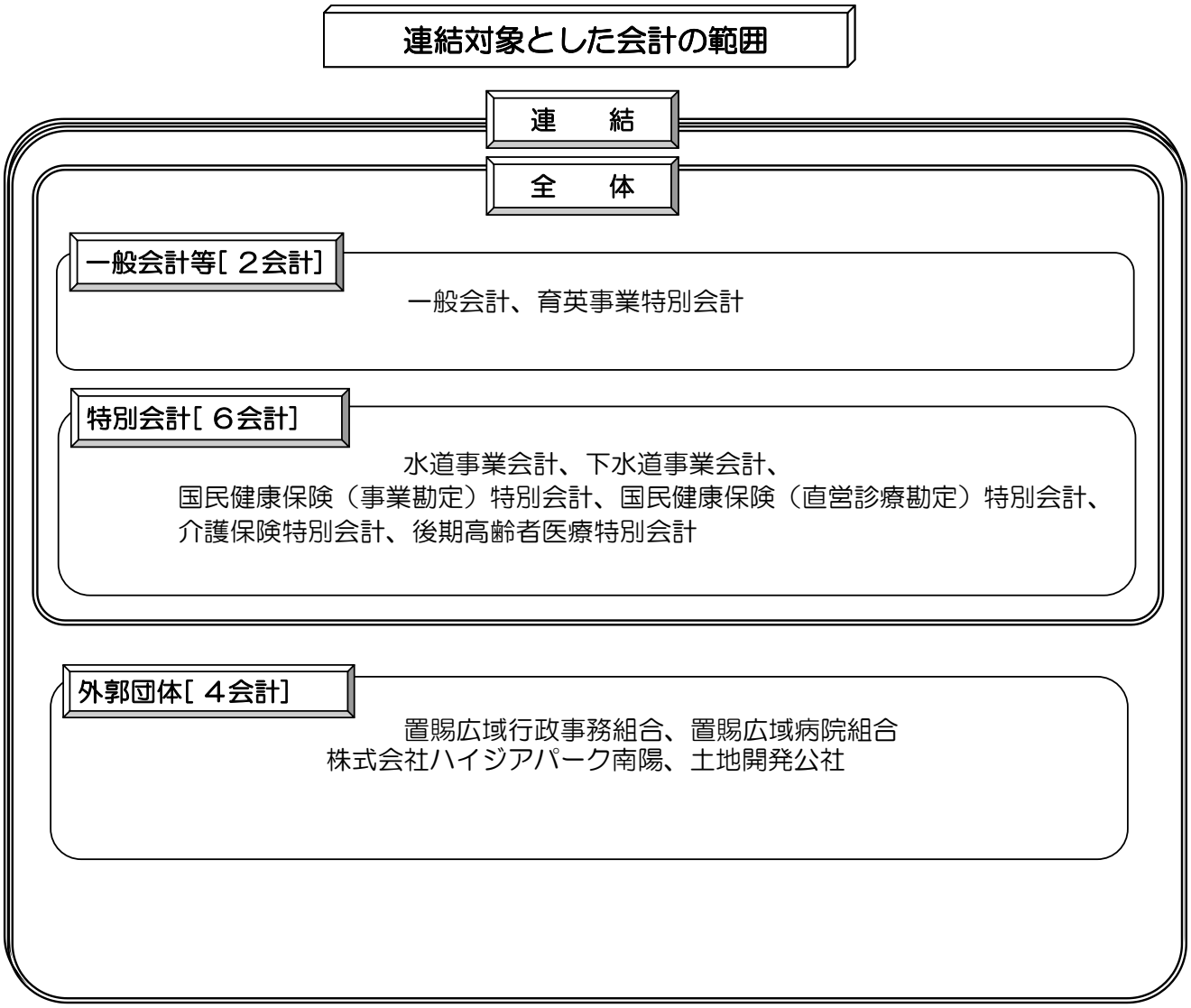
Ⅴ　財務書類分析からわかること
（1）比較分析のための前提条件
（2）貸借対照表から見える将来の負担
（3）実質債務（地方債等と現金預金）の状況
（4）純資産変動計算書の「本年度差額」の状況
（5）純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況
（6）資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支の状況
（7）歳入歳出決算書の経年データ

Ⅰ　令和元年度　南陽市財務書類の公表について

平成１８年６月に成立した「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」を契機に、地方の資産・債務改革の一環として「新地方公会計制度の整備」が位置づけられました。これにより「新地方公会計制度研究会報告書」で示された「基準モデル」又は「総務省方式改訂モデル」を活用して、地方公共団体単体及び関連団体等を含む連結ベースでの財務書類を人口３万人以上の都市においては、平成２１年度までに整備し公表するよう通知されました。

こうした状況を踏まえ、本市では平成２０年度から「総務省方式改定モデル」により資産台帳の整備に着手し、複式簿記に基づき発生主義による財務書類を作成することにより、本市が所有する全ての資産と負債状況や行政サービスに要したコストを把握してまいりました。

しかし、平成２６年４月３０日に財務書類の作成方法の統一化のための「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書」が取りまとめられ、平成２７年１月２３日に「統一的な基準による地方公会計マニュアル」が取りまとめられました。本市では平成２７年度から「統一的な基準」により財務書類を作成することにしました。これにより団体間の比較可能性が確保され、将来的には決算分析や予算編成への活用を考えています。



※　全体とは、一般会計等に特別会計を含めたもので、**連結**とは、全体に外郭団体を含めたものです。

なお、外郭団体のうち第三セクターについては、市の出資比率が５０％以上の団体を対象としています。

Ⅱ 地方公会計制度について

1. 固定資産台帳と財務書類の作成の必要性

① 税収も地方債も同じ財源だが、返済義務の有無で相違するので、地方債に依存すると債務肥大化する。
② 債務が肥大化した理由の一つは、財源に借金を含めて、財政運営をしてきたためである。
③ 財政改善のための歳入増、歳出減は難しく、資産債務改革が必要となり、資産に手を付けることになった。
④ 地方交付税算定のための公有財産台帳並びに各種法定台帳の作成（数量管理）から、有効活用のための固定資産台帳（金額管理）の作成
⑤ 厳しい財政事情のもと、財政の透明性、効率化、適正化が求められ、企業会計手法を活用した財務書類の開示も求められた。

2. 地方自治体における地方債の特徴

固定資産形成に充てるための地方債には、次の魅力がある。
① 財政運営上、借金は、現役世代と将来世代をつなぎ世代間公平性を確保するための、重要な架け橋である。
② 予算編成上、後日交付税措置される借金は、借金した方が得なので、税収・補助金収入と同様に、重要な財源である。

3. 企業会計手法の導入

（1）官庁会計に収支の概念を導入した
① 予算の適正・確実な執行においては、歳入と歳出は一致しなければならない。
② 財政状態を診断するためには、歳入から歳出を差し引いた収支の概念が必要となる。
（2）導入例
① 貸借対照表の純資産
② 純資産変動計算書の本年度差額
③ 資金収支計算書の基礎的財政収支（借金に依存しなかった場合の収支）
（あ）基礎的財政収支とは、計算上は、歳入から繰越金と公債発行を、歳出から公債費を、除外した収支。
（い）借金を財源とした結果、債務が肥大化したので、借金に依存しなかった場合の収支を把握する。

4. 財務書類とは？

（1）総務省の財務書類に対する考え方
① 財務書類の作成指針として、「民間の利益目的」でなく、「財政の三つの役割」を基礎にしている。
② 「財政の三つの役割」には、「資源配分機能」、「所得再分配機能」および「経済調整機能」。
③ 「資源配分機能」は、現役世代に対する資源配分と、将来世代に対する資源配分がある。
（2） 財務書類とは、自治体の「立ち位置」・「身の丈」を表す書類で、健康診断書でもあり、4表又は3表から構成される。

種類	数値の内容	収支尻概念の導入	情報内容
貸借対照表	発生主義データを含み、 年度末時点の財政状態を示す	純資産	年度末の財政状態を示す（ストック情報）
行政コスト計算書	減価償却費等の発生主義データを含む 現役世代に対する資源配分の内訳を示す	純行政コスト	1年間の運営状況を示す（フロー情報）
純資産変動計算書	現役世代に対する資源配分の合計額と将来世代に対する資源配分の増減額、並びに税収等財源を対比させ運営状況を示す	本年度差額	
資金収支計算書	現金主義により、 資金収支による運営状況を示す	基礎的財政収支	

☞当年度末のストック情報 ＝ 前年度末のストック情報 ＋ 本年度のフロー情報

（3）3表様式の長所
① 現役世代と将来世代に対する資源配分の状況の各内訳が、一つの表に集約されたので、議員、住民に対する説明が、しやすくなった。
② 行政コスト計算書と純資産変動計算書を結合させた書類が、民間企業の損益計算書に相当するので、理解しやすい。
（4）連結決算とは？
① 全体会計＝親＋子 ＝一般会計等決算＋公営事業会計
連結決算＝親＋子＋親戚＝一般会計等決算＋公営事業会計＋外郭団体（一組・広域＋関係団体）
② 連結決算の必要性
・ 親・子・親戚間で、「繰出金」、「負担金・補助金」、「委託費」を支出しており、資金関係が密接なため、相殺表示が必要である.。
（5）発生主義決算とは？
① ・歳入・歳出決算数値に、「見えないおカネ」を加えて決算すること。
・「見えないおカネ」とは、将来、資金の流出入が見込まれる事象に係る数値で、「発生主義数値」ともいう。
② 発生主義数値の例
・将来、資金の出し入れを伴い、債権債務の確定したもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・収入未済額、リース債務等
・現在、債権・債務は確定していないが、確定に準じたもの・・・・・・・・・・・・・・・・・賞与引当金、退職手当引当金等
・現時点の保有する資産の価値の増減を推定する項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・減価償却費、不納欠損額、評価損益等

5. 統一的な基準の活用方法

（1）固定資産データの活用

毎年の「維持費」に「減価償却費」を加えてフルコストによる「事業別または施設別収支」を作成すること。

① 施設の更新、統廃合について、リストアップして議論する段階で、数値情報を提供する。

② フルコストによる受益者負担割合算定のための、数値情報及び一人あたりコスト情報を提供する。

③ 民間の資金・ノウハウを活用したPPP／PFIの導入のために、固定資産データの公表が期待される。

（2）財務書類の活用

財務書類は、自治体の立ち位置・身の丈を把握する健康診断書である。

① 全ての地方公共団体が「統一的な基準」に基づき財務書類を作成するので、比較を可能にする

② 下記の指標により、財政運営上の目標設定を行い、今後の予算編成に活用する。

（イ）利払後基礎的財政収支並びに公債等償還可能年数　　（ロ）一人当たり実質債務残高

6. 日々仕訳とは？

（1）目的により簿記の方法が異なる。

① 予算の適正・確実な執行のためには、「複式簿記」より「単式簿記」が優れている。

② 財務書類を作成する場合、「見えないお金」も含むために、数値の正確性を担保するためには、「複式簿記」が必要。

（2）複式簿記の記帳のタイミング

① 「日々仕訳」が望ましいとされているが、そのためには全庁的に知識が必要。

② 金銭の入出金程度の記帳ならまだしも、日常業務に加えて複式簿記の習得など、民間ではあり得ない。

③ 事務負担や経費負担を考えて、「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書（平成26年4月総務省）294項」に記載された「期末一括仕訳方式」により作成する。

7..財務書類の作成ツール

① 「財務書類作成要領29段落」による集計値を使用する方法によれば、仕訳変換処理で特定できる場合の仕訳件数は、概ね節の科目数（歳入16・歳出28）程度の仕訳で済むので、表計算ソフトでの対応が可能となり、検証もしやすい。

② 当事務所の財務書類作成ソフトは、平成27年11月27日に特許権を取得した。

（参考）

（イ）統一的な基準で求められる固定資産台帳の基準モデル団体への取り扱い

① 固定資産マニュアルによれば、「既に固定資産台帳が基準モデル等に基づいて評価されている資産について、合理的かつ客観的な基準によって評価されたものであれば、引き続き、当該評価額によることを許容する」と記載し、二重負担を回避している。

② 道路、河川及び水路の敷地については、統一的な基準では、一定の場合1円評価としており、基準モデル評価を継続する場合、基準が異なることによる評価誤差が大きくなるので注記が求められる。

（ロ）統一的な基準で求められる複式簿記の方法

（1）財務書類作成の概略

① すべての資金取引について「仕訳変換」を行い、かつ、すべての非資金取引について「仕訳処理」を行い、仕訳帳に記載する。

② 仕訳帳が完成したら、会計ソフト、表計算ソフト等により集計し、総勘定元帳並びに試算表に転記し、財務書類が完成。

（2）仕訳帳への記載の仕方

① 単式簿記により記帳された歳入歳出データは、「仕訳変換処理」により、仕訳帳に記載する。

(a)予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できる」場合

・工事請負費・公有財産購入費・委託費等の固定資産に関係する予算科目を除くと、その多くの予算科目は、行政コストに計上されるものと資産に計上されるものとに、特定されている。

・特定された予算科目は、統一的な基準の地方公会計マニュアル資金仕訳変換表「別表6-1：6-2　」に従い、仕訳変換処理する。

・仕訳変換処理の設定をしておけば仕訳集計が、<u>自動計算されるので、簿記の知識の有無は重要ではない。</u>

(b)予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できない」場合

・「特定できない」場合とは、工事請負費等の固定資産に関係する予算科目の場合であり、個別伝票毎に、その歳入歳出について、行政コストなのか資産形成なのか、科目及び金額を特定する必要がある。

・資産形成か維持補修費の特定は、<u>簿記の知識が必要となり、システムの自動計算で変換してくれない。</u>

② 仕訳記帳されていない非資金取引（見えないお金）は、複式簿記により、仕訳帳に記載する。

・発生主義取引による非資金仕訳例は、「財務書類作成要領」の「別表7」に例示されている。

・作成担当者は、発生主義データの意味、計算過程を知る必要があるので、<u>複式簿記の知識が必要</u>である。

（3）仕訳変換処理の単位

① 仕訳帳は、歳入歳出データを単位として、伝票単位毎に作成することを、原則とする。

② 歳入歳出データとの整合性が検証できる場合には、「予算科目単位で集計した歳入歳出データ」に仕訳を付与し、仕訳帳の1単位とすることも妨げない。」という、予算科目単位の集計値による変換法とする。（マニュアル「財務書類作成要領29段落」）

Ⅲ 令和元年度 財務書類 （要約）

（1）貸借対照表（バランスシート）（令和2年3月31日）

令和2年3月31日現在に保有する資産、負債、純資産を表示したもので、地方自治体が、住民サービスを提供するために保有している資産と、その資産をどのような財源（負債・純資産）で賄ってきたのかについて、総括的に示したものです。行政的には、資産は、サービス提供能力を示し、負債は、将来世代の負担を示し、純資産は、現在までの世代の負担と捉えます。

（単位：百万円）

資産の部							負債の部						
項目	一般会計等		全体		連結		項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率		金額	比率	金額	比率	金額	比率
(1)固定資産	43,491	96%	65,789	95%	69,118	95%	(1)固定負債	16,182	36%	31,950	46%	34,255	47%
(1)有形固定資産	41,481	91%	62,025	90%	65,003	89%	①地方債等	14,074	31%	22,656	33%	24,464	34%
①事業用資産	23,558	52%	23,558	34%	26,133	36%	②退職手当引当金	2,108	5%	2,423	4%	2,808	4%
②インフラ資産	17,749	39%	38,142	55%	38,144	52%	③その他	0	0%	6,871	10%	6,984	10%
③物品	174	0%	325	0%	727	1%	(2)流動負債	1,638	4%	2,535	4%	2,932	4%
(2)無形固定資産	33	0%	1,054	2%	1,059	1%	①1年内償還予定地方債等	1,266	3%	2,052	3%	2,311	3%
(3)投資その他の資産	1,978	4%	2,710	4%	3,055	4%	②未払金	0	0%	71	0%	129	0%
①投資及び出資金	402	1%	405	1%	239	0%	③その他	373	1%	411	1%	492	1%
②長期延滞債権	83	0%	185	0%	185	0%							
③基金	1,642	4%	2,281	3%	2,626	4%	負債の部合計	17,820	39%	34,485	50%	37,187	51%
④徴収不能引当金	−9	0%	−22	0%	−22	0%	純資産の部						
⑤その他	−139	0%	−139	0%	27	0%	固定資産等形成分	44,456	98%	66,658	96%	69,980	96%
(2)流動資産	1,960	4%	3,314	5%	3,591	5%	余剰分（不足分）	−16,825	−37%	−32,039	−46%	−34,458	−47%
①現金預金	1,063	2%	2,293	3%	2,431	3%							
②未収金	19	0%	171	0%	307	0%							
③財政調整基金等	878	2%	878	1%	878	1%							
④徴収不能引当金	−0	0%	−41	0%	−45	0%							
⑤その他	0	0%	14	0%	20	0%	純資産の部合計	27,631	61%	34,619	50%	35,522	49%
資産の部合計	45,451	100%	69,104	100%	72,709	100%	負債・純資産の部合計	45,451	100%	69,104	100%	72,709	100%

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結	項目	一般会計等	全体	連結
資産の部	147 万円	223 万円	235 万円	負債の部	57 万円	111 万円	120 万円
				純資産の部	89 万円	112 万円	115 万円

項目の説明

（1）-(1)有形固定資産	①事業用資産 ： 庁舎や学校などの有形固定資産
	②インフラ資産 ： 道路や河川などの社会基盤となる資産
	③物品 ： 器具備品や機械装置などの資産
（1）-(2)無形固定資産	ソフトウェア等無形の資産
（1）-(3)投資その他の資産	①投資及び出資金 ： 運用目的の有価証券や出資金等の資産
	②長期延滞債権 ： 税等の未収金や貸付金などの回収期限到来後1年を経過した資産
	③基金 ： 特定の目的のために積立した資産
	④徴収不能引当金 ： 長期延滞債権や長期の貸付金に対して徴収不能とみられる金額を見積り引当した金額
（2）流動資産	①現金預金 ： 形式収支額（歳入歳出の差し引き額）や歳計外現金などの現金や預金の資産
	②未収金 ： 税収や使用料手数料のうち回収期限到来後1年を経過していない資産
	③財政調整基金等 ： 財政調整基金や1年以内に地方債の償還に充てられる減債基金
（1）固定負債	①地方債等 ： 地方債・借入金残高のうち翌年度に償還する額を除いた残高
	②退職手当引当金 ： 将来の退職者に対する給付すべきこととなる退職金の引当額
（2）流動負債	①1年内償還予定地方債等 ： 地方債・借入金残高のうち翌年度償還予定額
	②未払金 ： 企業会計団体の財貨または用役の提供を受けたが、支払が済んでいない残高
◎ 純資産合計	これまでの世代が負担して蓄積された資産

概 要

今までに南陽市では、一般会計等ベースで455億円、全体ベースで691億円、連結ベースで727億円の資産を形成してきています。

そのうち、純資産である、276億円（一般会計等）、346億円（全体）、355億円（連結）については、これまでの世代の負担で支払いが済んでおり、負債である178億円（一般会計等）、345億円（全体）、372億円（連結）について、これからの世代が負担していくことになります。

※ 令和2年3月31日の南陽市の人口： 31,001 人

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(2)行政コスト計算書及び純資産変動計算書(平成31年4月1日から令和2年3月31日)

行政コスト計算書は、1年間の行政運営コストのうち、福祉サービスなどの提供といった資産形成に結びつかない行政サービスに要したコストを人件費、物件費、その他の業務費用、移転費用に区分して表示したものです。

純資産変動計算書(NWM)は、純資産(過去の世代や国・都道府県が負担した将来返済しなくてよい財産)が年度中にどのように増減したかを、①財源、②資産評価差額、③無償所管替等、④その他に区分して表示したものです。

(単位:百万円)

項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率
1 経常費用 計 (行政コスト総額)	13,779	102%	20,831	108%	22,001	113%
① 人件費	2,262	17%	2,486	13%	3,472	18%
② 物件費等	4,933	37%	6,251	32%	7,142	37%
うち減価償却費	1,570	12%	2,316	12%	2,491	13%
③ その他の業務費用	189	1%	484	3%	531	3%
④ 移転費用	6,395	48%	11,611	60%	10,856	56%
補助金等	31,464	234%	31,464	163%	31,464	162%
社会保障給付	188,551	1401%	188,551	975%	188,551	971%
他会計への繰出金	78,042	580%	78,042	404%	78,042	402%
その他の移転費用	-291,662	-2168%	-286,446	-1481%	-287,201	-1478%
2 経常収益	342	3%	1,593	8%	2,651	14%
3 臨時損失	22	0%	105	1%	120	1%
4 臨時利益	3	0%	3	0%	43	0%
純行政コスト	13,455	100%	19,340	100%	19,426	100%
5 財源	12,589	94%	18,769	97%	18,987	98%
① 税収等	9,602	71%	12,038	62%	12,190	63%
② 国県等補助金	2,987	22%	6,732	35%	6,798	35%
本年度差額	-866	-6%	-570	-3%	-439	-2%
6 資産評価差額	8	0%	8	0%	8	0%
7 無償所管替等	-25	0%	-19	0%	-19	0%
8 その他の純資産変動額	72	1%	72	0%	-73	0%
本年度純資産変動額	-812	-6%	-509	-3%	-523	-3%
前年度末純資産残高	28,443	-	35,128	-	36,045	-
本年度末純資産残高	27,631	-	34,619	-	35,522	-

※固定資産等の変動(内部変動)・固定資産等形成分	-955	-	-1,121	-	-796	-
・有形固定資産等の増加	467	-	1,012	-	1,436	-
・有形固定資産等の減少	1,570	-	2,350	-	2,566	-
・貸付金・基金等の増加	1,159	-	1,278	-	1,269	-
・貸付金・基金等の減少	1,010	-	1,061	-	936	-

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結
1 純行政コスト	43 万円	62 万円	63 万円
2 財源	41 万円	61 万円	61 万円
3 本年度差額 (2財源－1純行政コスト)	-3 万円	-2 万円	-1 万円

項目の説明

1 経常費用	①人件費 : 職員給与や議員報酬、退職給付費用など
	②物件費等 : 備品や消耗品、委託費、使用料施設等の維持修繕に係る経費や事業用資産の減価償却費など
	③その他の業務費用 : 地方債、関係団体の借入金の償還利子や徴収不能引当金繰入額など
	④移転費用 : 住民への補助金や児童手当、生活保護費などの社会保障費など
2 経常収益	施設を使用した際に徴収する使用料や証明書の発行手数料、財産売払収入、雑入など
3 臨時損失	災害復旧事業費、資産の除売却損など臨時に発生するもの
4 臨時利益	資産の売却益など臨時に発生するもの
5 財源	①税収等 : 市税や利子割交付金などの交付金、特別会計の保険料等の収入など
	②国県等補助金 : 国や都道府県からの補助金収入
6 資産評価差額	有価証券等の評価差額など
7 無償所管替等	無償で譲渡または取得した固定資産の評価額等など
※固定資産の変動	有形固定資産・貸付金・基金等将来世代に対する資産形成の状況をいう

概 要

令和元年度の純行政コストは、一般会計等ベースで135億円、全体ベース193億円、連結ベースで194億円になります。

住民の皆さんが負担した市税や国県等補助金などの財源は、一般会計等ベースで126億円、全体ベースで188億円、連結ベースでは190億円になります。

純行政コストと財源に資産評価差額,無償所管替等を加減した本年度純資産変動額は、一般会計等ベースで△8億円、全体ベースで△5億円、連結ベースで△5億円であり、将来返済しなくてよい財産が一般会計等、全体、連結すべてで減少したことになります。

また、将来の世代に対する固定資産の変動状況ですが、一般会計等ベースで△10億円、全体ベースで△11億円、連結ベースで△8億円となり、一般会計等、全体、連結すべてで減少しました。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

（３）資金収支計算書（平成31年4月1日から令和2年3月31日）

資金収支計算書は、1年間の資金の出入りを、現役世代に対する「業務活動収支」と、将来世代に対する「投資活動収支」と、将来世代が負担すべき「財務活動収支」という三つに区分した計算書です。

（単位：百万円）

項目	一般会計等	全体	連結
(イ)業務活動収支（④−③+②−①）	667	1,344	1,573
①業務支出（注）	12,208	18,689	19,736
②業務収入	12,886	20,102	21,351
③臨時支出	11	70	82
④臨時収入	0	0	40
(ロ)投資活動収支（②−①）	−572	−1,062	−1,336
①投資活動支出	1,625	2,265	2,649
②投資活動収入	1,053	1,203	1,312
利払後基礎的財政収支(イ＋ロ)	**94**	**282**	**237**
(ハ)財務活動収支（②−①）	−152	−650	−608
①財務活動支出	1,250	2,061	3,349
②財務活動収入	1,098	1,411	2,742
1　本年度資金収支額(イ＋ロ＋ハ)	−58	−368	−371
2　前年度末歳計現金残高	1,027	2,567	2,704
3　比例連結割合変更に伴う差額	0	0	3
4　本年度末歳計現金残高(1＋2)	969	2,199	2,336
5　本年度末歳計外現金残高	94	94	95
6　本年度末現金預金残高(4＋5)	1,063	2,293	2,431
（注）うち、地方債等支払利息支出	114	271	288

項目の説明

イ−①業務支出 ： 行政サービスを行う中で、毎年度継続的に支出されるもの
（人件費、物件費、補助費、扶助費など）

イ−②業務収入 ： 行政サービスを行う中で、毎年度継続的に収入されるもの
（市税、保険料、使用料、手数料など）

イ−③臨時支出 ： 行政サービスを行う中で、臨時的に支出されるもの（災害復旧事業費など）

イ−④臨時収入 ： 行政サービスを行う中で、臨時的に収入されるもの
（資産の売却に伴う収入など）

ロ−①投資活動支出 ： 公共施設や道路整備などの資産形成、投資や貸付金などの金融資産形成に支出したもの

ロ−②投資活動収入 ： 公共施設の資産形成の財源に充てられた補助金収入、土地などの固定資産の売却収入など

ハ−①財務活動支出 ： 地方債や借入金などの元本の償還

ハ−②財務活動収入 ： 地方債や借入金の収入

概　要

令和元年度は、一般会計ベースで△1億円、全体ベースで△4億円、連結ベースで△4億円の資金が変動し、期末資金残高は、一般会計等ベースで10億円、全体ベースで22億円、連結ベースで23億円になりました。

利払後基礎的財政収支は、公債費を賄う財源となるものですが、一般会計等ベースで1億円、全体ベースで3億円、連結ベースで2億円でした。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

（4）財務書類の相関図

下記は、財務書類3表の関係を表しています。（一般会計等）

（単位：百万円）

【資金収支計算書＝CF】

項目		金額
(イ)業務活動収支		667
	①業務支出	12,208
	②業務収入	12,886
	③臨時支出	11
	④臨時収入	0
(ロ)投資活動収支		−572
	①投資活動支出	1,625
	②投資活動収入	1,053
(ハ)財務活動収支		−152
	①財務活動支出	1,250
	②財務活動収入	1,098
1　本年度資金収支額(イ＋ロ＋ハ)		−58
2　前年度末歳計現金残高		1,027
3　本年度末歳計現金残高(1＋2)		969
4　本年度末歳計外現金残高		94
5　本年度末現金預金残高(3＋4)		1,063

（注）1年間の資金の出入りを表す資金収支計算書の「本年度末現金預金残高」は、下記の貸借対照表の資産の部に計上されます。

（単位：百万円）

【行政コスト計算書及び純資産変動計算書＝NW】

項目		金額	固定資産等形成分	余剰分（不足分）
経常費用		13,779		
	業務費用	7,384		
	移転費用	6,395		
経常収益		342		
臨時損失		22		
臨時利益		3		
純行政コスト		13,455		13,455
財源		12,589		12,589
本年度差額		−866		−866
固定資産等の変動(内部変動)			−955	955
	有形固定資産等の増加		467	−467
	有形固定資産等の減少		1,570	−1,570
	貸付金・基金等の増加		1,159	−1,159
	貸付金・基金等の減少		1,010	−1,010
資産評価差額		8	8	
無償所管換等		−25	−25	
その他		72		
本年度純資産変動額		−812		
前年度末純資産残高		28,443		
本年度末純資産残高		27,631	44,456	−16,825

4表形式では、純行政コストまでが「行政コスト計算書」、財源から下が「純資産変動計算書」となる

（注）1年間の行政コストと財源等の収支尻を表す「本年度末純資産残高」は、下記の貸借対照表の純資産の部に計上されます。

（単位：百万円）

【貸借対照表＝BS】

資産の部			負債・純資産の部	
(1)固定資産		43,491	(1)固定負債	16,182
	有形固定資産	41,481	(2)流動負債	1,638
	無形固定資産	33	負債の部合計	17,820
	投資その他の資産	1,978	固定資産等形成分	44,456
(2)流動資産		1,960	余剰分（不足分）	−16,825
	現金預金	1,063		
	その他	897	純資産の部合計	27,631
資産の部合計		45,451	負債・純資産の部合計	45,451

（注）貸借対照表の純資産の部の「固定資産等形成分」の計算

① 開始時の「純資産の部合計」の計算

➡「資産の部合計」―「負債の部合計」・・・・差額である

② NWの本年度末残高と照合する、BS残高の算出方法

➡(固定資産合計−長期延滞債権+固定徴収不能引当金+投資損失引当金)+(短期貸付金+流動基金)

（注）「長期延滞債権」とは収入未済の滞納繰越分であり、その歳入金額は「余剰分」に含まれて「固定資産等形成分」に含まれないので、その算出から除外する。

③ 余剰分（不足分）の計算

➡「純資産の部合計」―「固定資産等形成分」・・・・・差額である

Ⅳ 分析比率

1．社会資本形成の世代間比率〔地方債等／（事業用資産＋インフラ資産＋物品）〕

・社会資本の整備の結果を示す事業用資産とインフラ資産と物品を地方債等などによってどれくらい調達したかを表します。
この指標が高いほど将来の世代が負担する割合が高いことを表します。

	令和元年度	平成３０年度	比較増減
一般会計等	37.0%	36.5%	0.5%
全　体	39.8%	40.1%	-0.3%
連　結	41.2%	41.2%	0.0%

2．純資産比率〔純資産／総資産〕

・企業会計でいう「自己資本比率」に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。
総資産のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。

	令和元年度	平成３０年度	比較増減
一般会計等	60.8%	61.2%	-0.4%
全　体	50.1%	49.7%	0.4%
連　結	48.9%	48.7%	0.1%

3．負債比率〔負債／純資産〕

・純資産（自己資本）に対する負債（地方債等）の割合を表すもので、この指標が低いほど財政状況が健全であるといえます。

	令和元年度	平成３０年度	比較増減
一般会計等	64.5%	63.5%	1.0%
全　体	99.6%	101.3%	-1.7%
連　結	104.7%	105.3%	-0.6%

4．有形固定資産減価償却率 〔減価償却累計額÷(有形固定資産－土地等＋減価償却累計額)〕

・有形固定資産が耐用年数に対して、資産の取得からどの程度経過しているのかを全体として把握することができます。

	令和元年度	平成３０年度	比較増減
一般会計等	54.3%	52.1%	2.1%
全　体	47.8%	45.8%	2.0%
連　結	49.2%	47.3%	1.9%

5．歳入額対資産比率 〔総資産÷歳入総額〕

・歳入総額に対する資産の比率を算出することにより、これまでに形成された資産が歳入の何年分に相当するかを表し、資産形成の度合を把握することができます。

	令和元年度	平成３０年度	比較増減
一般会計等	2.8年	3.0年	-0.2年
全　体	2.7年	2.9年	-0.2年
連　結	2.6年	2.8年	-0.2年

6．受益者負担比率 〔経常収益÷経常費用〕

・行政コスト計算書の経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額ですので、これを経常費用と比較することにより、行政サービスの提供に対する受益者負担の割合を算出することができます。

	令和元年度	平成３０年度	比較増減
一般会計等	2.5%	3.0%	-0.5%
全　体	7.6%	7.8%	-0.2%
連　結	12.0%	11.7%	0.3%

「負債比率」が一般会計等に比べて全体や連結で高いのは、水道事業や下水道事業が将来の使用料収入で資金回収することを前提として公債を活用する仕組みとなっていることに加えて、地方債の償還年限が一般会計等よりも長いことが主な要因です。

Ⅴ　財務書類からわかること

（1）比較分析のための前提条件

（注1）　統一的な基準で財務書類を作成している他の５団体（可能な限り同規模）と比較し、分析比率を算出する。

（注2）　他団体数値は、前年度公表データから引用しているが、空欄は未公表部分である。

（注3）　四捨五入をしたため一致しない部分があります。

・ 分析比率算定のための基礎データ

	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民数：人数	31,001	80,927	30,289	26,976	35,465	47,662
面積：K㎡	160.52	548.51	240.93	214.67	222.85	206.94
可住地面積：K㎡	64.92	133.29	78.58	79.08	96.34	75.12
職員数	282	972	328	275	279	369
財政力指数	0.48	0.57	0.49	0.44	0.52	0.65
経常収支比率	93.7	94.2	95.2	92.9	92.6	91.4
実質地方債費比率	11.9	8.3	8.2	11.3	8.4	7.1
将来負担比率	146.20	35.9	102.8	144.7	26.8	7.7
特記事項						

（2）貸借対照表から見える将来の負担

本年3月末時点の財政状態を、「どれだけ資産を持っているのか。」または、「将来負担がどれだけ残っているのか。」、どちらの視点で見るのか？　ここでは、後者の将来のリスクの観点から見ます。

住民サービスに供されている資産総額のうち、「将来の負担」が、どの程度の割合であるのか？
➡本年度末の資産総額に占める負債総額の割合は、39.2%となっている。

（a）経年比較　　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	32
資産合計	一般会計等	48,567	48,007	47,187	46,502	45,451	
	全体会計	72,900	72,363	71,468	70,709	69,104	
	連結会計	76,388	75,694	74,627	73,983	72,709	
負債合計	一般会計等	19,365	18,653	18,185	18,059	17,820	
	全体会計	38,173	36,880	36,237	35,581	34,485	
	連結会計	41,891	39,576	38,672	37,938	37,187	
負債の割合	一般会計等	39.9%	38.9%	38.5%	38.8%	39.2%	
	全体会計	52.4%	51.0%	50.7%	50.3%	49.9%	
	連結会計	54.8%	52.3%	51.8%	51.3%	51.1%	

（b）他団体比較　　（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
資産合計	一般会計等	45,451	126,712	50,656	29,282	59,233	61,111
	全体会計	69,104	176,129	70,988	36,881	80,167	92,739
	連結会計	72,709	184,616	74,715	43,470	87,054	97,177
負債合計	一般会計等	17,820	40,649	20,675	17,007	17,190	21,426
	全体会計	34,485	66,709	30,994	21,771	29,395	34,055
	連結会計	37,187	71,737	33,291	26,132	31,342	35,847
負債の割合	一般会計等	39.2%	32.1%	40.8%	58.1%	29.0%	35.1%
	全体会計	49.9%	37.9%	43.7%	59.0%	36.7%	36.7%
	連結会計	51.1%	38.9%	44.6%	60.1%	36.0%	36.9%

（3） 実質債務（地方債等と現金預金）の状況

「将来の負担」を、住民一人当たり実質債務でみた場合、他団体と比較してどのくらいあるのか？

➡本年度末では、11,757百万円あるが、住民一人当たりの実質債務は、379,240円となっている。

（a）経年推移

★一般会計等の実質債務

（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	32
借金	地方債等	15,101	14,788	14,385	14,301	14,074	
	1年以内償還予定地方債等	1,412	1,252	1,256	1,250	1,266	
	合計	16,513	16,040	15,641	15,552	15,340	
貯金	固定基金	823	1,013	1,325	1,252	1,642	
	現金預金	1,147	798	999	1,124	1,063	
	財政調整基金等	729	1,574	1,226	1,114	878	
	合計	2,699	3,385	3,550	3,491	3,583	
	差引	13,814	12,655	12,091	12,061	11,757	

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	25,643	24,812	23,912	23,358	22,656	
	1年以内償還予定地方債等	2,269	2,102	2,082	2,061	2,052	
	合計	27,912	26,914	25,994	25,418	24,709	
貯金	固定基金	1,323	1,494	1,852	1,824	2,281	
	現金預金	2,245	2,065	2,388	2,664	2,293	
	財政調整基金等	729	1,574	1,226	1,114	878	
	合計	4,297	5,134	5,466	5,602	5,452	
	差引	23,615	21,781	20,527	19,816	19,257	

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	28,127	26,400	25,514	24,879	24,464	
	1年以内償還予定地方債等	2,984	2,649	2,315	2,316	2,311	
	合計	31,111	29,049	27,829	27,196	26,775	
貯金	固定基金	1,453	1,827	2,220	2,216	2,626	
	現金預金	2,327	2,360	2,515	2,802	2,431	
	財政調整基金等	729	1,574	1,226	1,114	878	
	合計	4,509	5,761	5,961	6,132	5,935	
	差引	26,602	23,287	21,868	21,064	20,840	

★実質債務の経年推移

（単位：円）

区分	会計区分	27	28	29	30	31	32
住民一人当たり実質債務残高	一般会計等	428,514	395,365	381,821	384,106	379,240	
	全体会計	732,543	680,453	648,242	631,091	621,174	
	連結会計	825,201	727,527	690,590	670,829	672,251	
住民数		32,237	32,009	31,666	31,400	31,001	

（注）計算式＝実質債務（臨財債を含む）÷住民数

(b)他団体比較

★一般会計等の実質債務　（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
借金	地方債等	14,074	31,988	16,477	13,454	13,035	16,615
	1年以内償還予定地方債等	1,266	3,024	1,131	1,017	1,324	1,823
	合計	15,340	35,012	17,608	14,471	14,359	18,438
貯金	固定基金	1,642	5,977	774	752	1,601	2,601
	現金預金	1,063	1,341	810	558	1,122	1,040
	財政調整基金等	878	1,776	1,218	546	2,103	3,214
	合計	3,583	9,094	2,802	1,856	4,826	6,855
差引		11,757	25,918	14,806	12,615	9,533	11,583

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	22,656	48,902	25,130	16,721	20,959	26,262
	1年以内償還予定地方債等	2,052	4,872	1,658	1,287	2,175	2,520
	合計	24,709	53,774	26,788	18,008	23,134	28,782
貯金	固定基金	2,281	7,695	2,036	819	2,386	3,089
	現金預金	2,293	6,090	1,590	1,489	2,742	4,068
	財政調整基金等	878	1,776	1,218	816	2,103	3,214
	合計	5,452	15,561	4,844	3,124	7,231	10,371
差引		19,257	38,213	21,944	14,884	15,903	18,411

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	24,464	51,696	27,281	19,498	21,404	27,143
	1年以内償還予定地方債等	2,311	5,678	1,666	1,830	2,255	2,806
	合計	26,775	57,374	28,947	21,328	23,659	29,949
貯金	固定基金	2,626	9,109	2,179	1,790	3,291	3,487
	現金預金	2,431	6,903	2,049	1,797	3,161	4,695
	財政調整基金等	878	1,778	1,218	816	2,125	3,215
	合計	5,935	17,790	5,446	4,403	8,577	11,397
差引		20,840	39,584	23,501	16,925	15,082	18,552

(c)　住民一人当たり実質債務（財政の健全化の指標）

（単位：円）

区分	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民一人当たり実質債務残高	一般会計等	379,240	320,264	488,824	467,638	268,800	243,024
	全体会計	621,174	472,191	724,487	551,750	448,414	386,283
	連結会計	672,251	489,132	775,892	627,410	425,264	389,241

（注）計算式＝実質債務（臨財債を含む）÷住民数

(d)臨時財政対策債の経年推移

決算統計33表58行近辺の2列目・4列目より　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	32
臨時財政対策債	発行額	492	414	426	420	342	
	元金償還額	292	327	360	393	425	0
	現在高	5,559	5,646	5,712	5,739	5,656	5,656

（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	32
臨財債控除後現在高	一般会計等	10,954	10,394	9,929	9,813	9,684	−5,656
	全体会計	22,353	21,268	20,282	19,679	19,053	−5,656
	連結会計	25,552	23,403	22,117	21,457	21,119	−5,656

（4）純資産変動計算書の「本年度差額」の状況

貸借対照表のように過去から現在までの自治体の蓄積でなく、本年度の発生主義による数値を見ます。

①「本年度差額」は、民間企業の利益の計算式と同じですが、そういう観点に立った場合どうだったのか？

➡本年度の純行政コストと財源の差額である「本年度差額」は、一般会計等で−,866百万円である。

（a） 経年比較

NWMより　　（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	32
一般会計等	① 人件費	2,280	2,293	2,230	2,174	2,262	
	② 物件費等	4,000	4,341	4,561	4,675	4,933	
	③ その他の業務費用	282	223	200	184	189	
	④ 移転費用	5,617	5,967	6,426	5,762	6,395	
	経常収益	371	332	357	382	342	
	臨時損失	274	67	8	21	22	
	臨時利益	26	300	66	2	3	
	純行政コスト	12,056	12,259	13,002	12,432	13,455	
	① 税収等	9,304	9,404	9,377	9,114	9,602	
	② 国県等補助金	2,666	2,993	3,274	2,718	2,987	
	財源	11,970	12,397	12,651	11,832	12,589	
	本年度差額	−86	138	−351	−600	−866	
全体	① 人件費	2,527	2,555	2,673	2,418	2,486	
	② 物件費等	5,331	5,647	5,897	6,004	6,251	
	③ その他の業務費用	620	489	453	454	484	
	④ 移転費用	11,286	11,624	11,939	10,884	11,611	
	経常収益	1,496	1,471	1,479	1,551	1,593	
	臨時損失	277	75	197	36	105	
	臨時利益	27	300	78	2	3	
	純行政コスト	18,518	18,619	19,602	18,243	19,340	
	① 税収等	13,725	13,865	13,693	11,581	12,038	
	② 国県等補助金	5,107	5,370	5,653	6,511	6,732	
	財源	18,832	19,235	19,346	18,092	18,769	
	本年度差額	314	616	−256	−151	−570	
連結	① 人件費	3,801	3,349	3,555	3,231	3,472	
	② 物件費等	6,803	6,649	6,863	6,776	7,142	
	③ その他の業務費用	719	525	493	493	531	
	④ 移転費用	10,620	11,040	11,352	10,136	10,856	
	経常収益	3,407	2,479	2,547	2,413	2,651	
	臨時損失	351	94	208	46	120	
	臨時利益	33	26	107	26	43	
	純行政コスト	18,854	19,152	19,817	18,243	19,426	
	① 税収等	13,831	14,085	13,917	11,609	12,190	
	② 国県等補助金	5,138	5,399	5,668	6,602	6,798	
	財源	18,969	19,484	19,585	18,211	18,987	
	本年度差額	115	332	−232	−32	−439	
減価償却費	一般会計等	1,471	1,567	1,551	1,560	1,570	
	全体会計	2,195	2,301	2,290	2,304	2,316	
	連結会計	2,500	2,533	2,447	2,473	2,491	

（注）民間企業では、「本年度差額」が「利益」に相当するのでプラスの必要があるが、公会計は利益目的ではない。

公会計の場合、減価償却費が計上されるので、ほとんどの自治体でマイナスになる。

➡プラスかマイナスかが重要でなく、その水準での経年推移の分析が、重要である。

(b) 自治体間比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	① 人件費	2,262	4,360	2,461	2,093	2,384	2,551
	② 物件費等	4,933	10,654	4,560	3,906	5,381	7,627
	③ その他の業務費用	189	453	191	129	225	185
	④ 移転費用	6,395	16,798	4,927	6,303	7,008	7,481
	経常収益	342	852	582	614	521	537
	臨時損失	22	40	215	11	54	80
	臨時利益	3	118	241	7	34	11
	純行政コスト	13,455	31,335	11,531	11,821	14,497	17,376
	① 税収等	9,602	21,631	9,594	8,885	11,113	13,504
	② 国県等補助金	2,987	7,286	2,135	2,465	3,420	3,356
	財源	12,589	28,917	11,729	11,350	14,533	16,860
	本年度差額	-866	-2,418	198	-471	36	-516
全体	① 人件費	2,486	9,403	2,666	2,195	2,555	2,832
	② 物件費等	6,251	16,847	6,318	4,526	6,887	9,590
	③ その他の業務費用	484	1,309	427	302	649	551
	④ 移転費用	11,611	28,269	10,920	11,130	12,782	14,679
	経常収益	1,593	10,298	1,851	1,300	1,884	2,492
	臨時損失	105	49	215	12	56	80
	臨時利益	3	118	241	12	34	11
	純行政コスト	19,340	45,461	18,454	16,853	21,011	25,229
	① 税収等	12,038	27,946	14,862	11,106	14,074	16,857
	② 国県等補助金	6,732	15,936	3,919	5,413	7,559	8,311
	財源	18,769	43,882	18,781	16,519	21,633	25,168
	本年度差額	-570	-1,579	327	-334	622	-61
連結	① 人件費	3,472	10,930	3,120	4,131	3,072	4,701
	② 物件費等	7,142	25,309	7,022	6,795	7,426	11,196
	③ その他の業務費用	531	1,784	704	501	785	860
	④ 移転費用	10,856	35,461	14,609	12,717	15,069	18,073
	経常収益	2,651	18,531	2,609	3,979	1,972	5,107
	臨時損失	120	60	215	43	89	80
	臨時利益	43	118	241	98	38	13
	純行政コスト	19,426	54,895	22,820	20,110	24,431	29,790
	① 税収等	12,190	32,307	16,861	12,659	15,766	18,812
	② 国県等補助金	6,798	21,210	6,283	7,166	9,641	10,866
	財源	18,987	53,517	23,144	19,825	25,407	29,678
	本年度差額	-439	-1,378	324	-285	976	-112
減価償却費	一般会計等	1,570	4,399	1,567	1,119	1,769	2,043
	全体会計	2,316	6,493	2,393	1,405	2,642	3,056
	連結会計	2,491	6,843	2,570	1,733	2,932	3,349
一般会計等	人件費÷純行政コスト	16.8%	13.9%	21.3%	17.7%	16.4%	14.7%
	物件費÷純行政コスト	36.7%	34.0%	39.5%	33.0%	37.1%	43.9%
	移転費用÷純行政コスト	47.5%	53.6%	42.7%	53.3%	48.3%	43.1%
	国県等補助金÷財源	23.7%	25.2%	18.2%	21.7%	23.5%	19.9%

（5）純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況

将来世代への投資は、魅力的な町造りのためには、必須のものであるが、将来世代に対する投資水準を表した純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況がどうだったのか？

➡将来世代のための投資水準の変動を表す「固定資産等の変動」は、−955百万円であり、有形固定資産の変動額は、−1,104百万円で、金融資産の変動額は、149百万円である。

しかし、少子高齢化を踏まえ、長期計画立案の上で投資を決定する必要がある。

（a） 経年比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	27	28	29	30	31	32
一般会計等	固定資産等の変動（内部変動）	−204	−208	−1,024	−844	−955	
	有形固定資産等の増加	839	379	565	919	467	
	有形固定資産等の減少	1,471	1,569	1,551	1,576	1,570	
	貸付金・基金等の増加	717	1,255	718	943	1,159	
	貸付金・基金等の減少	289	273	756	1,130	1,010	
全体	固定資産等の変動（内部変動）	−479	−516	−1,154	−1,060	−1,121	
	有形固定資産等の増加	1,237	950	1,217	1,464	1,012	
	有形固定資産等の減少	2,215	2,429	2,379	2,381	2,350	
	貸付金・基金等の増加	803	1,308	836	1,013	1,278	
	貸付金・基金等の減少	304	345	828	1,156	1,061	
連結	固定資産等の変動（内部変動）	−712	−334	−1,020	−878	−796	
	有形固定資産等の増加	1,334	1,297	1,343	1,801	1,436	
	有形固定資産等の減少	2,534	2,752	2,538	2,551	2,566	
	貸付金・基金等の増加	810	1,328	877	1,039	1,269	
	貸付金・基金等の減少	322	208	702	1,167	936	

（b） 自治体間比較

NWMより

（単位：百万円）

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	固定資産等の変動（内部変動）	−955	−1,836	−1,263	636	−629	−1,744
	有形固定資産等の増加	467	1,379	1,229	2,621	1,056	1,425
	有形固定資産等の減少	1,570	4,451	3,054	1,470	1,881	2,158
	貸付金・基金等の増加	1,159	3,166	1,136	381	1,423	1,412
	貸付金・基金等の減少	1,010	1,930	574	896	1,227	2,423
全体	固定資産等の変動（内部変動）	−1,121	−3,746	−779	486	−410	−1,602
	有形固定資産等の増加	1,012	2,388	2,220	2,785	2,232	2,363
	有形固定資産等の減少	2,350	6,557	3,885	1,793	3,058	3,171
	貸付金・基金等の増加	1,278	3,859	1,521	413	1,750	1,666
	貸付金・基金等の減少	1,061	3,436	635	919	1,334	2,460
連結	固定資産等の変動（内部変動）	−796	−3,252	−563	1,508	−278	−1,472
	有形固定資産等の増加	1,436	3,180	2,555	3,239	2,684	2,661
	有形固定資産等の減少	2,566	6,907	4,082	2,126	3,384	3,475
	貸付金・基金等の増加	1,269	4,028	1,639	1,403	2,172	1,882
	貸付金・基金等の減少	936	3,553	675	1,008	1,750	2,540

(6)資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支(プライマリーバランス)の状況

・基金への積み立てを、投資活動収支に含める(①)か、含めない(①+③)か、二つの異なった健康診断がなされる。

➡①〉①+③の場合、基金繰入金相当額、良くなる。

➡①〈①+③の場合、基金積立金相当額、悪化する。

歳入歳出決算データを、業務活動収支と投資活動収支と財務活動収支の3つの収支に区分し、運営状況を見ます。

業務活動収支と投資活動収支を合算した利払後基礎的財政収支が、ゼロ以上であれば、地方債に依存しない財政運営が行われたことになりますが、どうだったのか？

➡本年度の利払後基礎的財政収支は、94百万円であり、基金の積立等を投資活動収支から除外した利払後基礎的財政収支は、243百万円です。

(a)経年比較

(単位:百万円)

区分	決算年度		27	28	29	30	31	32
一般会計等	業務活動収支		1,078	1,383	1,070	778	667	
	投資活動収支		−992	−1,263	−462	−642	−572	
	利払後基礎的財政収支(①)		86	120	608	136	94	
	財務活動収支(②)		90	−473	−399	−89	−152	
	本年度資金収支額(①+②)		176	−353	209	47	−58	
	除外	貸付金・基金等の増加	717	1,255	718	943	1,159	
		貸付金・基金等の減少	289	273	756	1,130	1,010	
		基金等増加(③)	428	982	−38	−187	149	
	利払後基礎的財政収支(①+③)		514	1,102	570	−50	243	
全体	業務活動収支		2,095	2,369	2,007	1,862	1,344	
	投資活動収支		−1,383	−1,554	−756	−1,089	−1,062	
	利払後基礎的財政収支(①)		712	815	1,251	773	282	
	財務活動収支(②)		−471	−998	−921	−575	−650	
	本年度資金収支額(①+②)		241	−183	330	198	−368	
	除外	貸付金・基金等の増加	803	1,308	836	1,013	1,278	
		貸付金・基金等の減少	304	345	828	1,156	1,061	
		基金等増加(③)	499	963	8	−143	216	
	利払後基礎的財政収支(①+③)		1,211	1,778	1,259	631	498	
連結	業務活動収支		2,223	2,762	2,360	2,053	1,573	
	投資活動収支		−1,454	−1,888	−880	−1,344	−1,336	
	利払後基礎的財政収支(①)		769	874	1,481	709	237	
	財務活動収支(②)		−511	−844	−1,321	−502	−608	
	本年度資金収支額(①+②)		258	30	160	207	−371	
	除外	貸付金・基金等の増加	810	1,328	877	1,039	1,269	
		貸付金・基金等の減少	322	208	702	1,167	936	
		基金等増加(③)	488	1,120	175	−128	334	
	利払後基礎的財政収支(①+③)		1,257	1,995	1,656	581	570	

(単位:年)

区分	決算年度	27	28	29	30	31	32
地方債等償還可能年数	一般会計等	192	133	26	114	163	
	全体会計	39	33	21	33	88	
	連結会計	40	33	19	38	113	

(単位:年)

臨財債控除後地方債等償還可能年数	一般会計等	127	87	16	72	103	
	全体会計	31	26	16	25	68	
	連結会計	33	27	15	30	89	

(b)他団体比較

（単位：百万円）

	区分		南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	業務支出		12,208	27,988	10,555	11,314	13,192	15,783
	業務収入		12,886	29,477	11,925	11,302	14,730	16,932
	臨時支出		11	0	0	0	33	0
	臨時収入		0	0	0	0	9	0
	業務活動収支（現役世代収支）		667	1,489	1,370	-12	1,514	1,149
	投資活動支出		1,625	5,861	3,252	2,664	2,101	3,004
	投資活動収入		1,053	3,623	3,206	1,402	1,316	3,035
	投資活動収支（将来世代収支）		-572	-2,238	-46	-1,262	-785	31
	利払後基礎的財政収支（①）		94	-749	1,324	-1,274	729	1,180
	財務活動収支（②）		-152	693	-1,239	1,264	-411	-735
	本年度資金収支額（①+②）		-58	-56	85	-10	318	445
	除外	貸付金・基金等の増加	1,159	3,166	2,008	395	1,273	1,579
		貸付金・基金等の減少	1,010	1,930	1,466	923	1,091	2,578
		基金等増加（③）	149	1,236	542	-528	182	-999
	利払後基礎的財政収支（①+③）		243	487	1,866	-1,802	911	181
全体	業務支出		18,689	49,210	17,870	16,717	20,085	24,561
	業務収入		20,102	53,162	20,206	17,039	22,863	26,896
	臨時支出		70	9	0	1	33	0
	臨時収入		0	0	0	0	9	0
	業務活動収支（現役世代収支）		1,344	3,943	2,336	321	2,754	2,335
	投資活動支出		2,265	7,908	4,560	2,879	3,108	4,154
	投資活動収入		1,203	5,791	3,254	1,446	1,451	3,241
	投資活動収支（将来世代収支）		-1,062	-2,117	-1,306	-1,433	-1,657	-913
	利払後基礎的財政収支（①）		282	1,826	1,030	-1,112	1,097	1,422
	財務活動収支（②）		-650	-1,258	-1,009	1,116	-787	-1,076
	本年度資金収支額（①+②）		-368	568	21	4	310	346
	除外	貸付金・基金等の増加	1,278	3,859	2,338	420	1,529	1,791
		貸付金・基金等の減少	1,061	3,436	1,466	923	1,115	2,578
		基金等増加（③）	216	423	872	-503	414	-787
	利払後基礎的財政収支（①+③）		498	2,249	1,902	-1,615	1,511	635
連結	業務支出		19,736	66,408	22,722	22,347	23,545	31,328
	業務収入		21,351	70,748	25,263	22,717	26,479	33,999
	臨時支出		82	9	0	30	33	0
	臨時収入		40	0	0		28	0
	業務活動収支（現役世代収支）		1,573	4,331	2,541	340	2,929	2,671
	投資活動支出		2,649	8,873	5,033	3,309	3,650	4,601
	投資活動収入		1,312	6,147	3,369	1,800	1,699	3,463
	投資活動収支（将来世代収支）		-1,336	-2,726	-1,664	-1,509	-1,951	-1,138
	利払後基礎的財政収支（①）		237	1,605	877	-1,169	978	1,533
	財務活動収支（②）		-608	-1,022	-840	1,150	-681	-1,172
	本年度資金収支額（①+②）			583	37	-19	297	361
	除外	貸付金・基金等の増加	1,269	4,028	2,428	421	1,617	1,942
		貸付金・基金等の減少	936	3,553	1,486	959	1,159	2,645
		基金等増加（③）	334	475	942	-538	458	-703
	利払後基礎的財政収支（①+③）		570	2,080	1,819	-1,707	1,436	830

・ 作成方法は、歳入歳出決算書の「款・節・細節」から繰越金・地方債発行・元金償還金を除外する。
・ 「基礎的財政収支」がゼロで成長率が利子率以上の場合、地方債残高は増えないとされている。
しかし、成長率が利子率以上という前提が成立しない場合には、利子償還金相当額、地方債残高は増加していくのである。
・ 財務省のHPでは、「財政収支」という言葉で表現されている。
「基礎的財政収支が均衡したとしても利払い費分だけ債務残高の実額は増加してしまうのである。これを止めるためには、利払い費を含む財政収支を均衡させる必要がある。この財政収支の均衡とは、新たに借金をする額と過去の借金を返す額が同額である状態を言う。」

★ 特徴

・ 当該年度で地方債を財源とする大きな普通建設事業があると、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。
・ 財政調整基金等の大きな貯金を行うと、投資活動支出に含まれるので、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。

(c) 地方債等償還可能年数を比較(財政の健全性の指標)

②利払後基礎的財政収支の数値がマイナスの場合は指標として意味を成しませんが、、プラスの場合、年度末の「地方債残高」から除して「地方債等償還可能年数」を算出できるので、自治体の現在の財政状態が示されます。

➡地方債等償還可能年数は、本年度、163年です。

・「地方債等償還可能年数」は、自治体の現在の財政状態を表す重要な指標である。

(単位:年)

指標	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
地方債等償還可能年数(注)	一般会計等	163	-47	13	-11	20	16
	全体会計	88	29	26	-16	21	20
	連結会計	113	36	33	-18	24	20

(注)計算式=地方債等残高 ÷ 利払後基礎的財政収支

★ 特徴

・ 地方債等償還可能年数は、本年度の収支が続くと仮定して、地方債等残高がゼロになる必要年数である。

・ 他団体の連結の平均的な年数ですあるが、当事務所のデータによれば、住民数20万人台の自治体では、概ね20年から40年という数値の財政状態のところが多くなっている。

・ 住民数50万人以上の自治体では、利払後基礎的財政収支、地方債等償還可能年数がマイナスで、地方債残高が増えていくという状況のところが多くなっている。

(7)歳入歳出決算書の経年データ

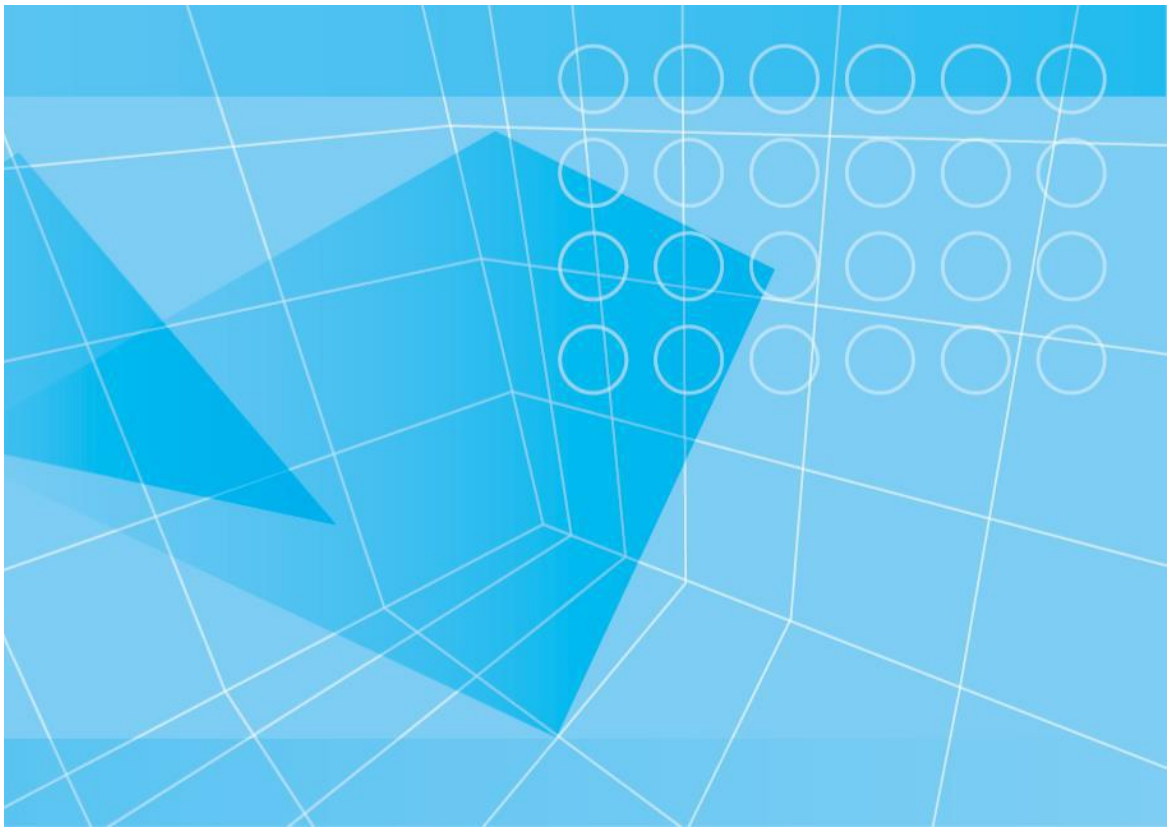
歳入歳出決算書より　　（単位：百万円）

款 or 節		27	28	29	30	31	32
予算現額		15,375	15,772	15,437	15,546	16,303	
収入済額	市町村税	3,534	3,537	3,600	3,595	3,730	
	地方消費税交付金	594	534	564	608	571	
	地方交付税	4,457	4,427	4,266	4,135	4,087	
	国庫支出金	1,696	1,719	1,636	1,686	1,955	
	都道府県支出金	971	1,274	1,639	1,032	1,032	
	その他の款	1,400	1,535	2,111	2,293	2,627	
	小計(①)	12,652	13,026	13,816	13,349	14,002	
	繰越金	945	1,118	762	968	956	
	地方債発行	1,434	789	853	1,166	1,098	
	合計(②)	15,031	14,933	15,431	15,483	16,056	
予算現額と収入済額との比較(予算差異)		344	839	6	63	247	
支出済額	委託料	1,524	1,663	1,918	1,814	1,758	
	工事請負費	1,172	530	625	1,149	988	
	負担金及び補助交付金	2,088	2,387	2,697	1,884	2,404	
	扶助費	1,895	1,979	2,507	2,214	2,294	
	繰出金	1,627	1,602	1,644	1,622	1,670	
	その他の節	4,093	4,594	3,682	4,393	4,615	
	小計(③)	12,399	12,755	13,073	13,076	13,729	
	地方債費	1,514	1,416	1,391	1,382	1,364	
	合計(④)	13,913	14,171	14,464	14,458	15,093	
不用額		344	839	6	63	247	
実質収支に関する調書より記入	歳入歳出差引額(②－④)	1,118	762	967	1,025	963	
	翌年度へ繰越すべき財源	46	50	32	104	22	
	実質収支額	1,072	712	935	921	941	
	基金繰入額	0	0	0	0	0	
	翌年度繰越金	1,072	712	935	921	941	

財源内訳

決算統計13表より記入	国庫支出金	1,684	1,699	1,625	1,688	1,943	
	都道府県支出金	967	1,274	1,638	1,029	1,027	
	使用料手数料	126	149	163	152	137	
	分担金負担金寄附金	206	194	207	206	156	
	財産収入	15	15	16	15	12	
	繰入金	33	83	55	288	149	
	諸収入	148	147	133	126	150	
	繰越金	0	0	0	0	0	
	地方債	940	374	427	747	757	
	一般財源等	9,784	10,224	10,188	10,198	10,750	
	歳出合計	13,903	14,159	14,452	14,449	15,081	

令和元年度
南陽市の財務書類
【分析編】



南陽市財政課

令和元年度決算に係る「統一的な基準による財務書類」について、以下の各表から抽出したデータを活用し、分析を行いました。

◆貸借対照表

貸借対照表は、基準日時点において、地方公共団体が住民サービスを提供するために、どれほどの資産や債務を有するかについて情報を示すものです。資産と財源となる負債及び純資産の合計は必ず一致します。負債は、将来世代の負担を意味し、純資産は、現在までの世代の負担ととらえます。

資産規模がどの程度あり（資産合計）、それに対する将来世代の負担（負債合計）が何%あるのか、また、一般会計等、全体会計、連結会計のそれぞれの区分ごとにどの程度あるのかを読み取ることができます。

◆行政コスト計算書

行政コスト計算書は、行政コストという経費明細という位置付けにあり、発生主義数値を含んだ現役世代に対する資源の配分の状況を示しています。行政コストの面では、人にかかるコストである人件費、物にかかるコストである物件費等、移転的な支出である移転費用等といった区分が設けてあります。

◆純資産変動計算書

貸借対照表の「純資産の部」に計上されている各数値が１年間でどのように変動したかを表している計算書です。

一会計期間に、税収と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのか、また、将来世代に対してどの程度資源配分したのか、つまり発生主義数値ではあるが住民から拠出された税収等が、どのように配分されたのかということを表しています。

◆資金収支計算書

資金収支計算書は、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」という表示区分を設けて収支状況を明示しています。

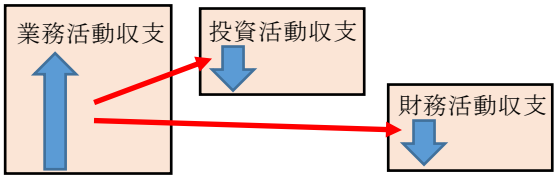
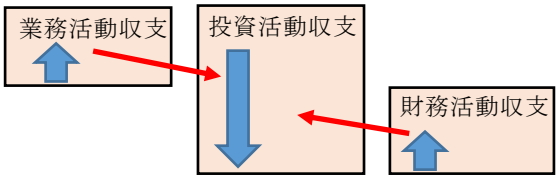
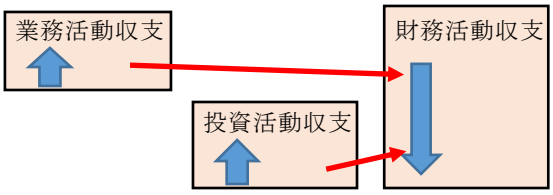
業務活動収支　：　地方公共団体の経営活動に伴い、継続的に発生する資金収支

投資活動収支　：　地方公共団体の将来世代に対する投資活動に伴い発生する資金収支

財務活動収支　：　地方公共団体の負債の管理に係る資金収支（負債の発行及び償還）

業務活動収支は税金と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのかを表します。業務活動収支と投資活動収支を合算して、プラスの場合借金が減少したことを意味し、マイナスの場合借金が増加したことを意味します。

３つの収支について、主なタイプの例示（赤色矢印の方向が資金の流れを示します。）

タイプ例	図解	汲み取ることのできる内容
健全タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆それでもなお余る資金は借金の返済（市債の償還）に充てる ◆公共資産への投資と借入金の返済を業務活動収支の範囲内により行っているため、健全といえる
積極投資タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆かつ、借金（市債の発行）をしてその資金を投資に充てている ◆業務活動収支の範囲を超えて（将来負担のリスクをとって）積極的に公共投資を行っている
債務圧縮タイプ		◆経常的に発生する業務活動により獲得した資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆かつ、公共資産や出資を売却する等して得た資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆債務が減少しているため、将来リスクは減少しているが、必要な投資を行う余裕がない

連結対象とした会計の範囲

連　結

全　体

一般会計等[２会計]　一般会計、育英事業特別会計

特別会計[６会計]　水道事業会計、下水道事業会計、国民健康保険（事業勘定）特別会計、国民健康保険（直営診療勘定）特別会計、介護保険特別会計、後期高齢者医療特別会計

外郭団体[４会計]　置賜広域行政事務組合、置賜広域病院組合
株式会社ハイジアパーク南陽、土地開発公社

◎財務書類分析の視点

総務省から示された以下の分析の視点を参考に分析を行いました。

【分析の視点】	【住民のニーズ】	【指　標】
資産形成度	将来世代に残る資産はどのくらいあるのか	◆住民一人当たり資産額 ◆有形固定資産の行政目的別割合 ◆歳入額対資産比率 ◆有形固定資産減価償却率 （資産老朽化比率）
世代間公平性	将来世代と現世代との負担の分担は適切か	◆純資産比率 ◆社会資本等形成の世代間負担比率 （将来世代負担比率） 【関係指標】　将来負担比率
持続可能性（健全性）	財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）	◆住民一人当たり負債額 ◆基礎的財政収支 ◆債務償還可能年数 【関係指標】　健全化判断比率
効　率　性	行政サービスは効率的に提供されているか	◆住民一人当たり行政コスト ◆性質別・行政目的別行政コスト
弾　力　性	資産形成を行う余裕はどのくらいあるか	◆行政コスト対税収等比率 【関係指標】　経常収支比率 実質公債費比率
自　律　性	歳入はどのくらい税金等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）	◆受益者負担の割合 【関係指標】　財政力指数

1 資産形成度　　将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるのか」といった住民の関心に基づくものです。

資産に関する情報は、歳入歳出決算書に添付される「財産に関する調書」においても、公有財産、物品、債権、及び基金の種別により記載されています。しかし、土地及び建物並びに山林は、地積や面積で測定され、動産も個数で表示されるなど、市が保有する資産の価値に関する情報を得ることができません。

貸借対照表（BS）は、資産の部において市の保有する資産のストック情報を一覧表示しており、これを「市民一人当たり資産額」や「有形固定資産の行政目的別割合」、「歳入額対資産比率」、「有形固定資産減価償却率」といった指標を用いてさらに分析することで新たな情報を得ることができます。

市民１人当たり資産額

$$\frac{\text{資産総額}}{\text{住民基本台帳人口}}$$

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	149.9万円	150.0万円	149.0万円	148.1万円	146.6万円
全体	224.9万円	226.1万円	225.7万円	225.2万円	222.9万円
連結	235.7万円	236.5万円	235.7万円	235.6万円	234.5万円

資産総額を住民基本台帳人口で除することにより、市民１人当たりの資産額を算出します。類似団体との比較に利用します。

平成27年から令和元年にかけて、一般、全体、連結ともほぼ同額となっています。これは、資産額が減少しているのと同じ割合で、住民基本台帳人口の減少が生じているためです。令和元年度は、道路関係ほか、小中学校の空調設備整備、丸堤多目的広場などが新たに資産として計上されています。

【資産総額】

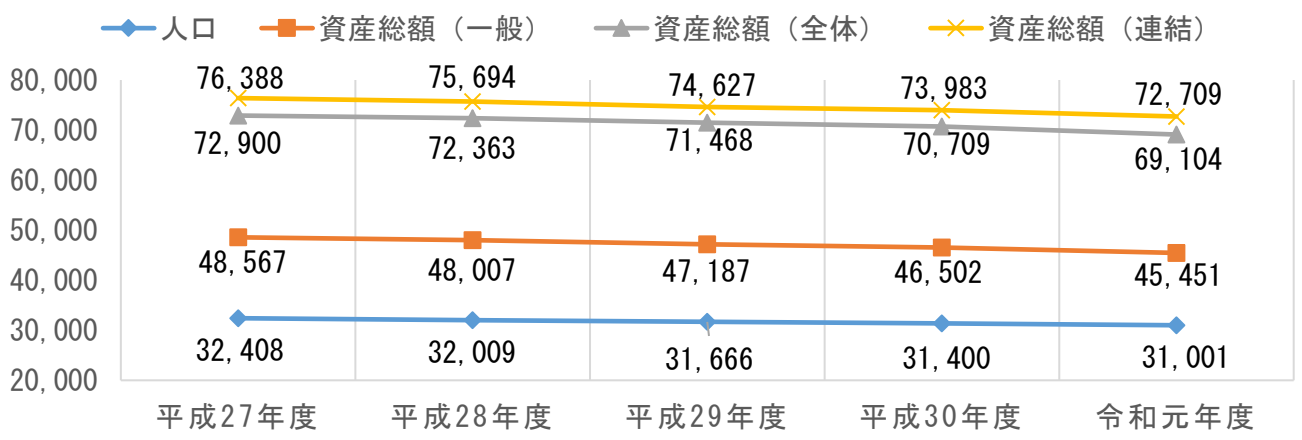
	H27	R元	H27～R元増減額
一般	48,567百万円	45,451百万円	▲3,116百万円
全体	72,900百万円	69,104百万円	▲3,796百万円
連結	76,388百万円	72,709百万円	▲3,679百万円

【住民基本台帳人口】

平成27年　32,408人　　R元年　31,001人　　（▲1,407人）

※一般的な値　：　100万円～300万円程度

【単位】
人口　　：人
資産総額：百万円



歳入額対資産比率

$$\frac{\text{資産総額}}{\text{収入総額}}$$

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	3.4年	3.5年	3.2年	3.2年	3.0年
全体	3.3年	3.3年	3.1年	3.2年	3.0年
連結	3.0年	3.1年	3.0年	3.1年	2.9年

資金収支計算書の収入総額に対する資産総額の割合をいいます。これまでに形成された資産が収入の何年分に相当するかを表し、地方公共団体の資産形成の度合いを測ることができます。

平成27年から令和元年にかけて、一般、全体、連結とも緩やかに減少しています。令和元年一般会計等においては、平成27年と比較すると資産総額は31億円の減、収入総額は9.5億円の増となっており、歳入額対資産比率は0.4ポイント減少しています。

南陽市は、一般的な団体の平均より低い数値となっています。この歳入額対資産比率が高ければ、社会資本の整備に重点を置いてきたことを表しますが、歳入規模に対して過度の社会資本整備を行っている場合などは、今後それらの維持のための負担が大きくなり、将来の財政運営を圧迫するおそれがあります。必ずしも高ければよいものではないことに留意する必要があります。

※一般的な値　：　3.0年～7.0年程度

有形固定資産減価償却率

$$\frac{\text{償却資産の減価償却累計額}}{\text{償却資産の取得価額等}}$$

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	46.6%	48.8%	50.9%	52.1%	54.3%
全体	40.6%	42.6%	44.5%	45.8%	47.8%
連結	42.5%	44.1%	45.9%	47.3%	49.2%

有形固定資産のうち償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合をいいます。

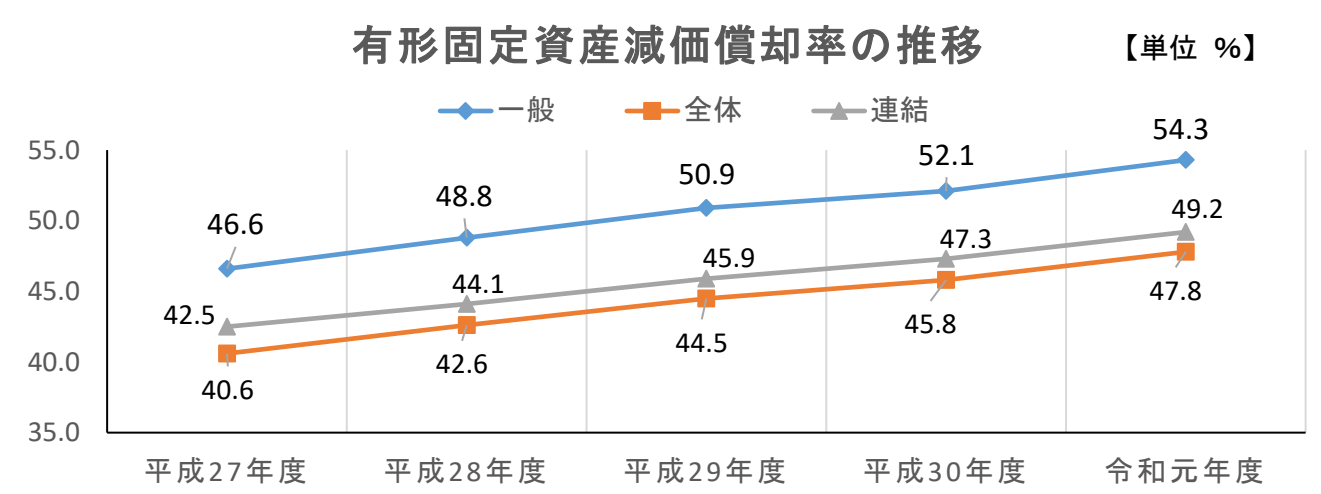
耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを表し、資産の老朽化のおおよその度合いを測ることができます。

一般的に数値が高いほど老朽化が進んでいるといえます。本市においては公共施設を長く維持・活用し、トータルコストを抑えていくため、施設の長寿命化に取り組んでいます。そのため、この数値は今後も上昇していくことが予想されます。

平成27年から令和元年にかけて、一般7.7%、全体7.2%、連結6.7%それぞれ増加しています。これは、新たに取得した資産の額に比較して減価償却額が大きいことを示しています。

本市においては、文化会館が平成26年に建築された影響（取得価格が大きく、かつ減価償却累計額が小さいのでこの数値を下げる要因となります。）で、有形固定資産減価償却率はそれほど高い数値を示しているわけではありません。しかしながら、本市においては４割以上の公共施設が築30年を経過するなど、全体としては施設の老朽化が進んでいる状況にあります。

※一般的な値　：　35%～50%程度



2 世代間公平性　　将来世代と現世代との負担の分担は適切か

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」といった住民の関心に基づくものです。これは、貸借対照表上の資産、負債及び純資産の対比によって明らかにされます。

世代間公平性を表す指標としては、地方財政健全化法における「将来負担比率」もありますが、貸借対照表により、財政運営の結果として、資産形成における将来世代と現世代までの負担のバランスが適切に保たれているのか、どのように推移しているのかを端的に把握することが可能となります。「純資産比率」や「社会資本等形成の世代間負担比率（将来世代負担比率）」が分析指標として挙げられます。

純資産比率

$$\frac{\text{純資産総額}}{\text{資産総額}}$$

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	60.1%	61.1%	61.5%	61.2%	60.8%
全体	47.6%	49.0%	49.3%	49.7%	50.1%
連結	45.2%	47.7%	48.2%	48.7%	48.9%

資産総額のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。
純資産の変動は、将来世代と現世代の間で負担の割合が変動したことを意味します。

企業会計でいう自己資本比率に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。

平成27年から令和元年にかけて、一般0.7%、全体2.5%、連結3.7%それぞれ増加しています。

これは、有形固定資産の減価償却などを理由として資産総額が減少しているなか、純資産の減少が緩やかであったことによります。

なお、純資産は次の式において表すことができます。　純資産　＝　資産　－　負債

【資産総額】
前述のとおり

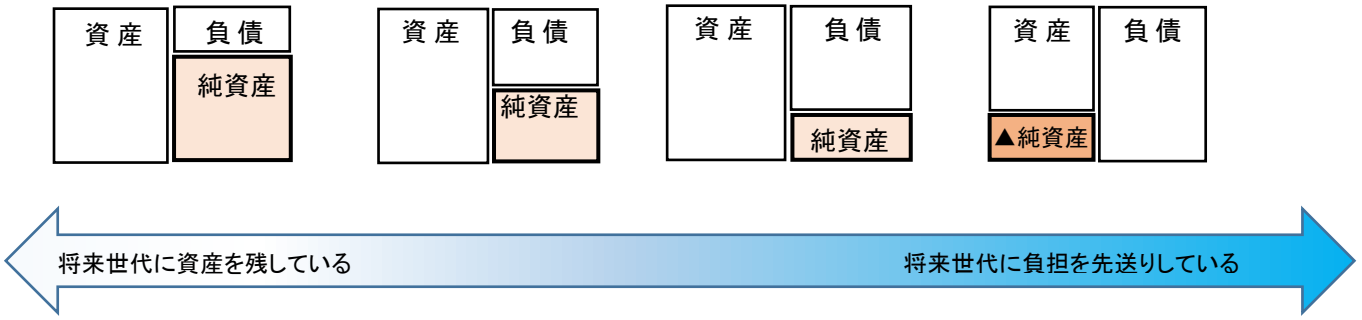
【純資産総額】

	H27	R元	H27～R元増減額
一般	29,202百万円	27,631百万円	▲1,571百万円
全体	34,727百万円	34,619百万円	▲108百万円
連結	34,497百万円	35,522百万円	1,025百万円

純資産額の増加は、現世代が自らの負担によって将来世代も利用することができる資源を蓄積したことを表しています。反対に純資産の減少は、将来世代が利用することができた資源を現世代が消費して便益を受ける反面、将来世代に負担が先送りされたことを表します。

全体、連結の値が低いのは、水道事業及び下水道事業の仕組みが、将来の使用料収入で回収することを前提としていることや、地方債の償還年限が一般会計等よりも長いことが要因です。

※一般的な値　：　50%～90%程度



将来世代負担比率		平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
地方債＋１年内償還予定地方債 / 有形固定資産＋無形固定資産	一般	36.4%	36.3%	36.2%	36.5%	37.0%
	全体	41.2%	40.5%	39.8%	39.5%	39.2%
	連結	44.0%	42.2%	41.0%	40.5%	40.5%

社会資本等について地方債により形成した割合をいいます。数値が大きいほど社会資本等の形成に係る将来世代の負担の比重が大きくなります。

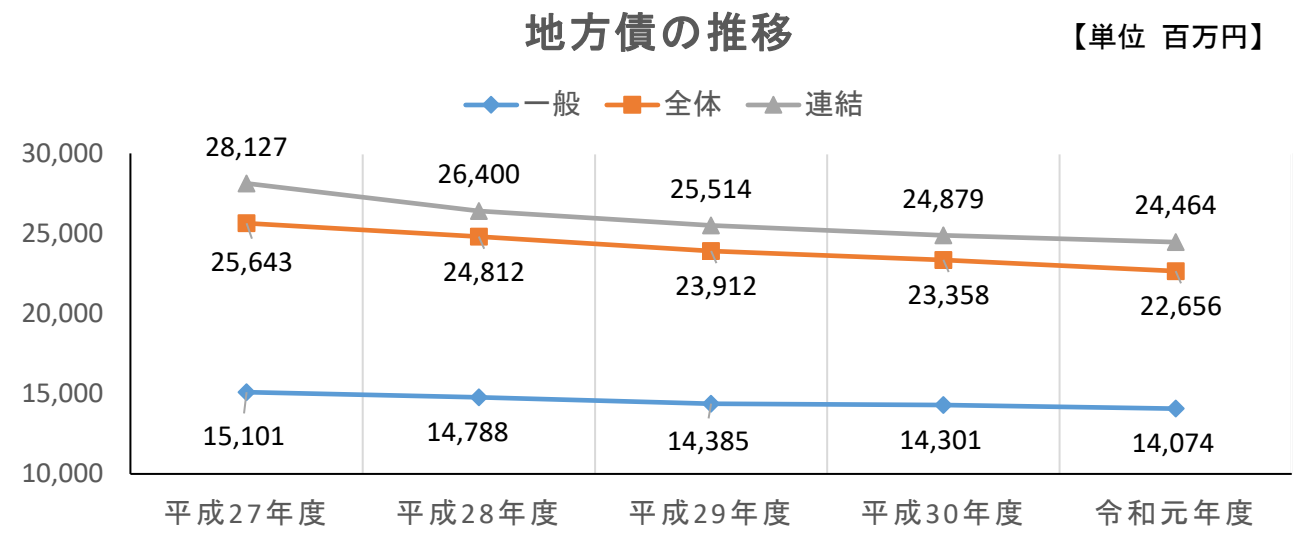
平成27年から令和元年にかけて、一般は0.6%増加しましたが、全体2.0%、連結3.5%それぞれ減少しています。

これは、全体、連結会計において、将来世代の負担が着実に減少していることを表しています。数値が減少した主な要因は、地方債の減少です。地方債の発行には後年度の財政負担を伴いますが、「歳入・歳出の年度間調整」や「世代間公平のための調整」といった調整機能が備わるため、適切に発行されれば安定的な行政サービスの提供に大きく役立つものとされています。これからも本市の現状を正確に把握し、適正な発行額となるよう努めていきます。

【地方債の額】

	H27	R元	H27～R元増減額
一般	15,101百万円	14,074百万円	▲1,027百万円
全体	25,643百万円	22,656百万円	▲2,987百万円
連結	28,127百万円	24,464百万円	▲3,663百万円

※一般的な値　：　10%～40%程度



3 持続可能性（健全性）　　財政に持続可能性があるか

持続可能性（健全性）は、「財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）」という住民の関心に基づくものであり、財政運営に関する本質的な視点といえます。これに対しては、第一に、地方財政健全化法の「健全化判断比率」（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率及び将来負担比率）による分析が行われますが、これに加えて財務書類も有用な情報を提供することができます。

市の負債に関する情報については、現行の「予算に関する説明書」においても、債務負担行為額及び地方債現在高についてそれぞれ調書が添付されていますが、貸借対照表においては、このほかに退職手当引当金や未払金など、発生主義により全ての負債を捉えることが可能となります。

財政の持続可能性に関する指標としては、「市民一人当たり負債額」、「基礎的財政収支（プライマリーバランス）」、「債務償還可能年数」があります。

市民１人当たり負債額

負債総額 ／ 住民基本台帳人口

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	59.8万円	58.3万円	57.4万円	57.5万円	57.5万円
全体	117.8万円	115.2万円	114.4万円	113.3万円	111.2万円
連結	129.3万円	123.6万円	122.1万円	120.8万円	120.0万円

人口１人当たりの負債総額をいいます。類似団体との比較に利用します。

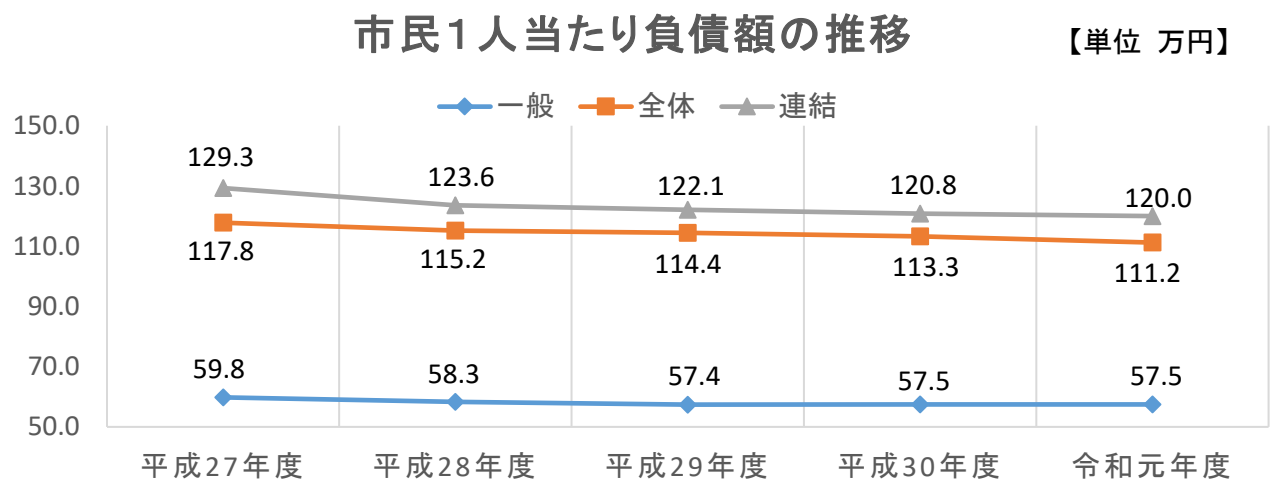
平成27年から令和元年にかけて、一般2.3万円、全体6.6万円、連結9.3万円それぞれ減少しています。これは、負債のうち、地方債（地方債と１年内償還予定地方債の合計額）の減少によるものです。令和元年一般会計等においては、市債発行額11億円に対し、元金償還額12.5億円となっており、前年度と比較すると 市債残高（地方債の額＋１年内償還予定地方債の額の合計）が2.1億円減少しています。

【地方債の額】
前述のとおり

【１年内償還予定地方債の額】

	H27	R元	H27～R元増減額
一般	1,412百万円	1,266百万円	▲146百万円
全体	2,269百万円	2,052百万円	▲217百万円
連結	2,984百万円	2,311百万円	▲673百万円

※一般的な値　：　30万円～100万円程度



基礎的財政収支（プライマリーバランス）		平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
業務活動収支－支払利息支出(▲)＋投資活動収支	一般	3.5億円	2.7億円	7.5億円	2.6億円	2.1億円
	全体	12.1億円	11.8億円	15.8億円	10.7億円	5.5億円
	連結	13.0億円	12.6億円	18.3億円	10.3億円	5.2億円

支払利息支出を除く業務活動収支及び投資活動収支の合計額をいいます。
地方債等の元利償還額を除いた歳出と地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表します。

各年度ともにプラスの数値を確保しており、公債費に依存しない財政運営が行われたことを示しています。

この数値が均衡（０に近い。）している場合には、経済成長率が長期金利を下回らない限り経済規模に対する地方債の比率は増加せず、持続可能な財政運営であるといえます。反対にこの数値が大きくマイナスになると、その年の経費が市債に依存しないと賄えなかったことを意味し、そのままの財政運営を継続していくことは困難になります。

債務償還可能年数		平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
地方債＋１年内償還予定地方債 / 業務収入－ 業務支出	一般	12.2年	11.1年	14.5年	19.9年	22.6年
	全体	11.8年	11.0年	12.0年	13.6年	17.5年
	連結	12.1年	10.2年	11.1年	13.3年	16.6年

業務活動収支（臨時収支を除く。）に対する地方債残高の割合をいいます。
地方債の償還に要する年数を表し、年数が短いほど債務償還能力があるといえます。

平成27年から平成28年にかけて、一般、全体、連結ともそれぞれ減少し、平成28年から令和元年にかけては増加しています。令和元年度一般会計等においては、前年比2.7ポイント数値が上昇していますが、これは分母である「業務活動収支」が前年比1.1億円（7.8億円→6.7億円）減少したことによります。業務支出のうち、数値が伸びた項目は以下の項目です。

物件費等支出　：　247百万円（3,116百万円→3,363百万円）
補助金等支出　：　523百万円（1,884百万円→2,407百万円）
主なものとしては、沖郷地区新保育施設整備事業費補助金223百万円があります。

債務償還可能年数は、償還財源上限額を全て債務の償還に充当した場合に、何年で現在の債務を償還できるかを表す理論値です。債務の償還原資を経常的な業務活動からどれだけ確保できているかということは、債務償還能力を把握する上で重要な視点のひとつといえます。

※一般的な値　：　3年～9年程度

（注）「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい　においては、債務償還可能年数の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】　（将来負担額 － 充当可能基金残高）÷（業務収入等 － 業務支出）

4 効率性　　行政サービスは効率的に提供されているか

効率性は、「行政サービスは効率的に提供されているか」という住民の関心に基づくものです。地方自治法においても、第２条第１４項において「地方公共団体は、その事務を処理するに当たっては、住民の福祉の増進に努めるとともに、最小の経費で最大の効果を挙げるようにしなければならない」とされています。財政の持続可能性と並んで住民の関心が高い視点といえます。

行政の効率性を表す「行政コスト計算書」は、市の行政活動に係る人件費や物件費等の費用を発生主義に基づきフルコストとして表示するものであり、行政の効率化を目指す際に不可欠な情報を一括して提供するものとなっています。

行政コスト計算書においては、「住民一人当たり行政コスト」を用いることにより、効率性の度合いを定量的に測定することが可能となります。

住民１人当たり行政ｺｽﾄ

純行政コスト
住民基本台帳人口

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	37.2万円	38.3万円	41.1万円	39.6万円	43.4万円
全体	57.1万円	58.2万円	61.9万円	58.1万円	62.4万円
連結	58.2万円	59.8万円	62.6万円	58.1万円	62.7万円

住民１人当たりの行政コストをいいます。
類似団体との比較に利用することで、地方公共団体の行政活動の効率性を比較することができます。

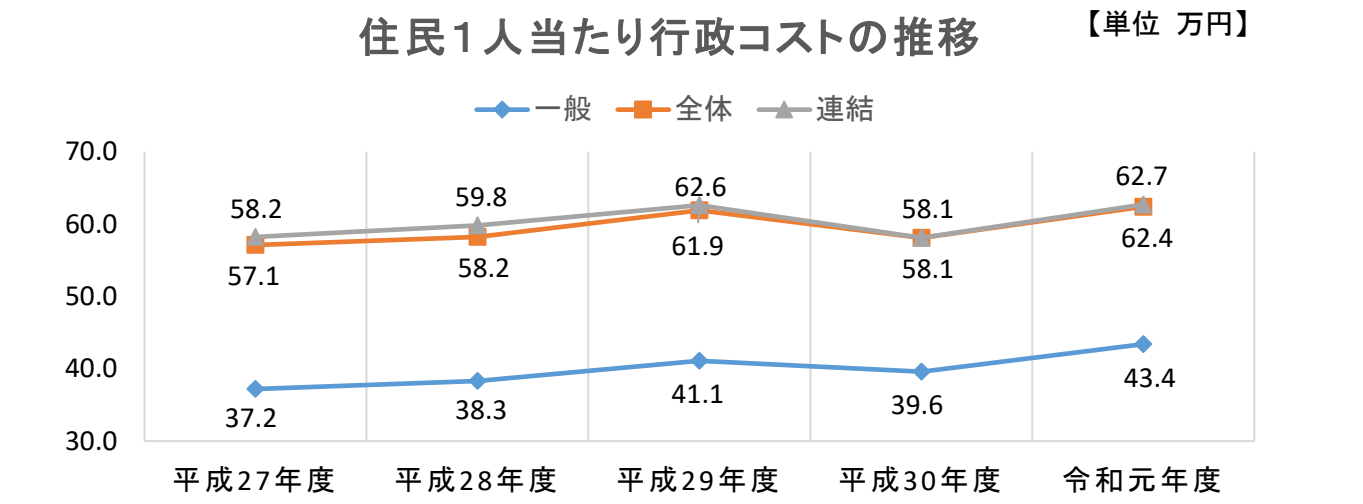
平成27年から令和元年にかけて、一般は6.2万円、全体は5.3万円、連結は4.5万円増加しています。これは、純行政コストの増加と住民基本台帳人口の減少によるものです。純行政コストが増加した理由は、経常費用のうち「移転費用」の項目に含まれる「補助金等」が増加したことによります。

【純行政コストの額】

	H27	R元	H27～R元増減額
一般	12,056百万円	13,455百万円	1,399百万円
全体	18,518百万円	19,340百万円	822百万円
連結	18,854百万円	19,426百万円	572百万円

平成29年から平成30年にかけて、純行政コストが570百万円減少したことにより一般、全体、連結とも大きく値を下げていますが、令和元年についてはいずれの会計も平成29年を上回る値となっています。要因としては、純行政コストが平成30年と比較し10億円増加したことと、住民基本台帳人口の減少が生じているためです。

※　住民１人当たり行政コストについては、地方公共団体の人口や面積、行政権能等により異なります。一概に他団体との比較を行うことは適切ではないため、比較する際には類似団体で行うこととされています。



5 弾力性　　資産形成を行う余裕はどのくらいあるか

弾力性は「資産形成等を行う余裕はどのくらいあるか」といった住民の関心に基づくものです。
財政の弾力性については、一般に、「経常収支比率」等が用いられますが、財務書類においても弾力性の分析が可能となっています。「純資産変動計算書」において、市の資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているか「行政コスト対税収等比率」を示すことができます。
これは、市がインフラ資産の形成や施設の建設といった資産形成を行う財源的余裕度がどれだけあるかを示しています。

行政コスト対税収等比率

純経常行政コスト / 財源

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	98.7%	100.8%	103.2%	104.9%	106.7%
全体	97.0%	98.0%	100.7%	100.6%	102.5%
連結	97.7%	97.9%	100.7%	100.1%	101.9%

資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているかを示します。

平成27年から令和元年にかけて、一般8.0%、全体5.5%、連結4.2%それぞれ増加しています。令和元年一般会計等においては、平成30年と比較すると純経常行政コストは10億円の増、財源は7.6億円の増となっており、1.8ポイント増加しています。この比率が100%に近づくほど資産形成の余裕度が低いといえ、さらに100%を上回ると、過去に蓄積した資産（基金など）が取り崩されたことを表します。
基金取崩収入（令和元年一般会計等）：前年比124百万円の減（1,076百万円→952百万円）

【純経常行政コストの額】

	H27	R元	H27～R元増減額
一般	11,808百万円	13,436百万円	1,628百万円
全体	18,268百万円	19,238百万円	970百万円
連結	18,536百万円	19,350百万円	814百万円

【財源の額】

	H27	R元	H27～R元増減額
一般	11,970百万円	12,589百万円	619百万円
全体	18,832百万円	18,769百万円	▲63百万円
連結	18,969百万円	18,987百万円	18百万円

※平均的な値：９０％～１１０％程度

6 自律性　　行政コストに対する受益者の負担はどのくらいあるか

自立性は「歳入はどのくらい税収等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）」といった住民の関心に基づいています。

これは市の財政構造の自律性に関するものであり、決算統計における「歳入内訳」や「財政力指数」が関連しますが、財務書類についても、「行政コスト計算書」において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

受益者負担の割合

$$\frac{\text{経常収益}}{\text{経常費用}}$$

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
一般	3.1%	2.6%	2.7%	3.0%	2.5%
全体	7.6%	7.2%	7.1%	7.9%	7.7%
連結	15.5%	11.5%	11.4%	11.7%	12.1%

経常費用に対する使用料及び手数料を主とする経常収益の割合をいいます。
受益者が負担しない部分については、税、地方交付税及び補助金等により賄われます。

平成27年から令和元年にかけて、一般、連結は減少しましたが、全体は0.1ポイント増加しました。令和元年一般会計等においては、平成30年と比較すると経常収益は0.4億円の減、経常費用は9.8億円の増となっており、0.5ポイント減少しています。

一般的に病院、ガス、上下水道事業を行う地方公共団体は、受益者負担比率の数値が高くなる傾向があります。

【経常収益の額】

	H27	H28	H29	H30	R元
一般	371百万円	332百万円	357百万円	382百万円	342百万円
全体	1,496百万円	1,471百万円	1,479百万円	1,551百万円	1,593百万円
連結	3,407百万円	2,479百万円	2,547百万円	2,413百万円	2,651百万円

【経常費用の額】

	H27	H28	H29	H30	R元
一般	12,179百万円	12,824百万円	13,417百万円	12,795百万円	13,779百万円
全体	19,764百万円	20,315百万円	20,962百万円	19,759百万円	20,831百万円
連結	21,943百万円	21,563百万円	22,262百万円	20,636百万円	22,001百万円

※平均的な値：２％～８％程度

（注）「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい　においては、受益者負担の割合の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】　使用料及び手数料　÷　純経常行政コスト

【参考資料】　「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」
落合幸隆著　（株）ぎょうせい